

帽子返り強く、鈍なく匂ひ出来多し、一門には皆焼刃などあり、中心たなご形にして先ほそく一風變つた形にて俗に村正中心と云ふ位なり銘は二字村正と切る。

短刀は身巾廣目にて重ね薄く、及紋、箱形に矢筈亂れ交り、亂の谷刃先にぬけ出したるものあり

尾張國

この國は美濃關係のものにて著名なるは國次兼延などあり、新刀も同様にて政常、信高等あり何れも武用刀には良刀多くあり。

三河國

中原國宗の類あるが京風にて地がね黒味あり及は小五の目、小丁子などある、新刀には關係のもの多くあり。

遠江國

當國には元暦以前の刀匠と友安の類あれど作品極めて少なし、關の兼明高天神に住し造るこれは大體關物と同様なり。

駿河國

この國は島田義助の一派が有名なり、刀及小脇差短刀あり、相州傳多く、中には皆焼刃などあり刀は寸詰り小脇差短刀最も多くあり、大平造もあり、及紋直刃、亂刃あり稀に砂流し交り相州上位の如きあり、鈍なく匂ひ出来なるもあり。

相模國

當國は京大和、備前に後れて最も發達したる地なり、京より栗田口國綱始めて鎌倉に來り、續

いて備前より三郎國宗、藤源次助真などの名人が集まり、五郎入道正宗の出現により相州傳の一派が開け、この一門より全國に傳へられて名人が續出したのである。

相州物之掟

- 一、陰陽にたとへれば當國は陽の作りなり、刀脇差ともに身巾廣目に重ね薄く、切先伸心になり反り淺きが多い、反りあるものは笠木形に反る。
- 二、棟は眞の棟多く自然に庵むねもある、眞の棟は古いものは眞の中廣し。
- 三、鉞出來なるもの多く如何にもはせやかな光ありて一番に目に付ものなり。
- 四、亂刃の時は匂ひうすく成がちなり、直刃は之れに反し匂ひ深し。
- 五、刃紋のたれ亂、皆焼刃、丁子刃、玉、半月、扇刃短冊など色々なる焼あり。
- 六、この國は切先より刃を焼くと傳へらるゝにより先の刃自然に廣く亂なども一層強くなる。

七、村雲の帽子の事。

八、亂返り深く鉞よく付事。

九、棟焼あり湯走りある事。

十、銀へ板目第一にて空肌必ずあらはるゝ事。

十一、地色青く晴れて涼し心の事。

十二、切先の内亂心を用ゆる事。

十三、鉞筋、掃掛ある事。

十四、彫物の深さ中に姿物々しく、劍先などもいかり、樋、梵字、以下姿働らき恰好揃ふべき事、總じて勢ひあり物たらぬことなし、花やかに大にあそびたる見付なる事。

十五、中心の事、行光、正宗、貞宗、綱光、重光この中心の姿は本ふとく先次第にほそく、平たにて四方すりたけに肉なく、先劍頭にして如何にもすつきりと尋常なり、先切にて丸みなるもあ

り、末々の方も大畧右の姿同様なり、中には稍や「たなこ」形を用ゆ、肉ありて先きり細く美しく丸し、先劔頭もあり、やすりは横或は筋違なり、脇差の棟は角、刀は丸し、新藤五一家は粟田口物に同じ、山内助眞、國宗は姿つよく備前物同様なり。

○備前三郎國宗太刀多く短刀を見ず、此作には必ず刃染あり、これ特色なり。

○新藤五國光は太刀もあれど短刀多し、地がね如何にもこまかく品位ある直刃多し。

○助眞、鎌倉一文字と稱するだけ刃紋の働き見事にて大丁子、重花丁子などあり總て大一文字の風ありて刃の働は他作の追隨し得ざる處あり。

○大進坊、小脇差短刀多し、彫物の上手にて見事な彫を見る、刃は直刃小亂刃などあり鈍匂深し。

○行光、新藤五の弟子と云ふ此人あたりより所謂相州物の作風とはなれり。

○正宗、稀代の名人にて刃紋五の目、馬の齒亂れ、耳形の丁子いろくの刃あり、砂流し交り、鈍つき、匂ひ深く足入り、其美事なること形容の辭なし、刃には玉あり島あり川ありて其働きは物に

例へやうもなし、この作には在銘物頓となく、世に名物多くあれども何れも無銘なり。

○貞宗、正宗に似て上手なり、これも在銘稀にして無銘多し。

○廣光、正宗の子と云ふ貞宗に似て上手なり。

○秋廣、正宗に似て作柄大模様なり、地がね稍や荒きものなり。
末相州物になると地がね荒く刃中の働き乏しく肌白けて立つ心なり。

○新 刀

新刀は綱廣の末其他清平、清次などあるが名匠すくなし。

武 藏 國

この國は江戸の未だ開けざる以前は八王子在恩方村下原に多く鍛冶が住す、これを下原一派と稱す、享祿頃の周重より一門繁昌をなし新刀期に至る。

總て相州風の造込にて中には相州物の上位とも見るべきもの多くあり、多くは末の相州に似るもの多し、彫物は一種獨特の妙味あるものあり、武用刀としては最も勝れし物多くあり。

○新 刀

江戸は徳川幕府の創設に始まりて鍛冶も諸國より移住して大繁昌をなしたるが、傳統いろ／＼ありて一樣ならず、然し京大阪の如く何んとなくやさしみのある作風に比して、多くが江戸前とも言ふか一種の勇み肌に武張つた造込が多いのも面白い對照である、四五の作風を記して見ると左の通りである。

○虎徹、新刀屈指の名高い鍛冶なり、無反りに近く品位あり、及紋廣直及ほつれ、五の目亂れ鈍つき匂深く及中の働き見事なり、地がね又こまかく光り強く肌小柸目にて少し立心あるも麗ひありて見事なり。

○繁慶、古作相州傳に似たり。

○康繼、本國越前にて中直刃、のたれ刃あり、肌白けて少し立心あり、一門多く虎徹に比しては劣るも之又上手なり。

○法城寺一類、但馬法城寺の末といふ、康繼に稍や似るも重ね厚く姿つよし、直刃、のたれ、五の目亂などあり、鈍匂ひ深し。

○石堂一派、刃紋の上手にして一文字風なり、丁子逆丁子いろ／＼の亂あり。

○水心子一派、これは古刀の鍛冶を研究發明し一門より名人を多く出せり、直胤、正義など其高足なり。

○清麿、山浦環清麿といふ新々刀の名人なり、相州及美濃の兩傳を造る、總て覇氣ありて鈍匂ひ深く、及は正行時代には直刃も見ることが五の亂れ足入れ匂ひ出來あれども、後は相州或は關物の如くにして盛んなるもの多し。

近 江 國

この國には相州貞宗同人といふ高木貞宗あり、甘呂俊長其他あるが何れも本國同様なり。

○新 刀

新刀には佐々木一峯が著名なり、これは石堂派より分れたものなるが比較的武張つた作柄多し。

美 濃 國

この國の鍛冶の多くは大和より移住したるものなれば、どことなく大和に似たる風あり、志津三郎兼氏、金重は正宗門なれば相傳を加味したる作にて又其一門直江志津も同様なり、其他千手院派或は善定といろくの流派あり。

○美 濃 國 掟

一、美濃物は陰陽きまらず、陰と陽との間を造る、大體本國大和出なれば大和物に似て鳥居反り淺く中切先にして鎬は棟の方へよりせまく高くなる心なり、刀脇差ともに庵むね丘なるが多い。

二、彫はすくないが自然にある時は大和又は相州の風あり。

三、脇差の姿は恰好あしく伸すぎて刃肉なく無反りに近きものが多い。

四、刃は尖り刃と言つて亂頭の先が如何にもきつく鋸の刃の如く亂るゝなり、それからこの國の刃は亂刃の大きな處は大きく刃先が揃ひ、小亂れはこまかく揃ふものなり。

五、帽子の返りに二つあり、一つは亂れ込んで尖り、一は地藏頭の如くなり、何れも返り深し、末關物は木股、燒崩れいろくあり表裏の出來にも異なるものが多い。

六、銀へは古きは柃目もあり後は杢目が多い、末關は地がね廉にして肌白け立つもの多し、大體匂本位の國なれども志津の類は鈍つくものなり。

七、中心のやすりは檜垣鷹の羽多く、小筋遠いもあり、中心元にて肉をもち先次第にほそく棟丸し、脇差短刀の棟は定まらず、棟肉又は角もある。

この國の一番見易き處は如何なる作にても十中の九までは亂先の刃尖るものなり、全亂刃中に

一二ヶ所は必ず尖刃あり、それに帽子の返り深し。

○志津兼氏刀多く小脇差すくなく短刀を折に見る、笠木返り浅く、身巾稍や廣く重ね薄く鎧高く鎧巾せまく切先伸び、中切先、大切先あり、庵むね高く眞の棟もある、短刀は先反り心なり、刃紋五の目亂、大亂れあり及中鈍崩れあり、鈍つきて匂ひ深く砂流し金筋交り及中の働き盛んなり。

○直江志津、大體兼氏に似て劣る。

○善定派、大和手搔に似て姿やさしく、細直刃は京物來の如きあり、小五の目亂もあり、柂目に小柁目肌交り見事なり、この作には鈍あるもの少なし。

○兼元、孫六と稱す、刃紋五の目亂れ、俗に三木杉と稱す、三つ尖つた刃が揃へば一つは高くなり或は低く焼く、帽子は地藏、亂込多し、關物中一番見易きものなり。

○兼定、同銘數人あるが定の字の下を之に切るを之定と云ふ、又これを正に切ると正定といふ、之定には大亂れ矢筈亂れ五の目亂れなどありて鈍匂ひ深く上手なり、中には地がねこまかく京物の如

き作あり。

○新 刀

此國の新刀は末關物と大差なく總別重ね厚き心にて反りなく、刃紋五の目亂れ三本杉風の物或は灣れ刃などありて武用には至極よいものがある。

陸 奥 國

陸奥國は舞草の一派と寶壽の一派あり、舞草の元祖安房は承平頃とあり以下數名の鍛冶が銘鑑の上から見るが實物は頼と見ない、寶壽一派は折々見るが京大和に比して作柄劣る。

○新 刀

仙臺に山城大椽國包とて柂目鍛への名人あり、大和保昌五郎の末といふ、保昌に似て柂目を造る初心者と雖も要易に見分け得るものなり、初代を慶長寛永として以下數代あり。

出羽國

この國は月山の一派がある古きは永曆頃と云ふ以下數人あり、この作は綾杉肌とて最も見易き特徴あり、ウヅマキたる肌が流れ出した様なもので古きより新らしきまで皆綾杉肌を用ゆ。

岩代

會津は古き鍛冶はゐないが關の兼定移住し維新頃迄造る、其他陸奥大塚三善長道の一派が繁昌し華實兼備の作多くあり。

北國物の掟

越後、越中、越前、加賀、能登、若狹の國を俗に北國物といふ、北陸道は諸國より鍛冶の移住せしもの多く爲に一樣ならず、北國物の掟として古來左の如く傳へてゐる。

- 一、姿形刀脇差ともに重ね厚く太く、一見頑丈なる心持の作が多い。
- 二、鍛ひは多く板目なれども若狹一流、越前の古きは肌合こまかくして小柰目に柁目交るものなり
- 三、地がね色合は總じて黒すみたる物多し。
- 四、鉞はあらかきものが多くしてハゼザル事。
- 五、棟は庵淺きを用ゆるが中に眞の棟もあり。
- 六、亂刃の時は地シヅまりて肌合見事なり。
- 七、直刃の時は地定まらずして廉き物あり。
- 八、帽子は丸く大きく或は掃掛つきて崩れたるもありて返りは深きが多い。
- 九、棟焼、湯走りあるものなり。
- 十、亂刃の時は亂頭丸きが多く中には尖りたるもあり、藤島及千代鶴一派は刃紋小模様なるが多く、其他は比較的大模様なり。

十一、砂流し鑑筋あるものなり。
十二、中心本先の分ちなく太く賤しく肉あり、やすり揃はずして横を用ひ先は切又は丸し、藤島の先は劍頭及上りなり。

若 狹 國

小濱住す冬廣の一派あり、相州三代廣次の子といふ刀脇差、短刀あり、刀は笠木反りにて少しく先反りの心あり、身中廣きもあれど比較的ほそく重ね厚く棟は庵或は眞の棟あり、及紋いろくあるが、細直及に面白き作を折々見る。

○新 刀

冬廣の末繁昌し、この一派より安藝に分れしもあり、作柄古刀に似る

越 前 國

當國は來國俊の門此地に來り造る、千代鶴の祖にて越前來と稱す、數名あるが來に似て地がね黒く作柄劣る。

○新 刀

新刀鍛冶は康繼の一派と美濃より移住せる兼法一派、國廣門の國清の派と入込んでゐるが數十名の鍛冶が住し盛んに造りたれば、中には上手も少なからず、この國より諸國に分れしものが多い、一般に武用刀として賞美されるもの多し。

加 賀 國

當國は則重の門眞景の一派と藤島の一類あり、眞景は相州傳を鍛ふ、藤島一類は備前物の如き作柄多くあり。

○新 刀

新刀には美濃關より移住せる兼若の一族が繁昌をなし、續いて陀羅尼勝國、清光、炭宮の一族などありて之又業物多く武用刀として賞美される物多し。

越 中 國

この國には相州正宗の高足郷義弘、則重の名人あり、兩作とも最上位のものにて世に名高し、義弘は氣品高く地及の働き絶妙にて勝れしものなり、則重は大亂及五の目亂などあるが銚匂ひ深く義弘に劣らぬ作品がある、この作には刀全體いづこかに必ずウヅマキたる如き肌あり、あまり多くあるは賞美せず、其他宇多の一派あり、これは以上の作に比し數段劣るものなり。

越 後 國

この國には山村の一派あり、京信國より別れしといふ、其作風は似るも上手ならず、それから桃

川長吉の一派あり古きは建武頃といふ、京物に似て地がね黒く細直及に面白き物を見る

丹 波 國

この國には粟田口派の國定と來國俊門の國俊移住しゐるが、其作柄は本國同様なり、國俊は丹後にも住すと云ふ、世に丹波來と稱す。

但 馬 國

當國は相州貞宗門人の國光あり、薙刀の名人にして作物も多くあり、長刀直し、葛蒲造りなどある、及紋五の目亂れ砂流交り及中働きありて銚匂ひ深く相州貞宗などに見て少しく劣り、格好の變りし物は此作に極まるもの多くあり。

因 幡 國

當國は栗田口吉正の弟子景長あり、因幡小鍛冶といふ、其作風は京物に似て寸詰りのもの及小脇差短刀多くあり、地がねこまかく小柰目に柁交り、地鈍つくも無いのもある、及紋ほそ直ぐ又は小五の目亂れなどありて匂ひ深く足入り、總て上品なり。

○新 刀

新刀は出羽大椽國路門の忠國と關係の兼光、濱部美濃守壽格の一門あり、壽格一門は備前物に似て丁子及の上手なり。

伯 耆 國

當國は安綱、眞守の名人あり、安綱は大同の頃といふ、以下眞守、守綱、眞綱いづれも上手なりこの一門は太刀多く小脇差短刀すくなし、及は小亂れ多く直及ほつれ様もある。地がねこまかく無地がねの如くなり、總て品位高く美事なるものなり。

新刀は廣賀の一門あり

出 雲 國

當國は備前吉井の吉則移住して造れるが大體本國作に似る、道永、忠貞などは反り淺く末備前に近い出來多きを見る。

新刀は大明京其他加藤綱俊門の長信などあり。

石 見 國

當國は五郎入道正宗門の直綱の一派ありて繁昌す、直綱は笠木反りにて反り高く又腰反りもあり、身巾普通にして重ね厚く、鎧巾せまく、棟は庵低く眞の棟もあり、切先延び心にて相州備前とも見らるゝ出來あり、及紋備前風にして五の目亂れ大亂れあり、鈍すくなく匂ひ深く、砂流しあり、末

作はほそ直及又は五の目亂れなどあるが鈍なく、及中淋しく働きも乏しきものなり。
新刀は二王の一派と水田國重の一派が住す、他にもあれど居住少なし。

播 摩 國

この國には國吉を始め刀匠も少なからざれども現在のもの極めて少なし、其作柄は大和に似て細直及、直及ほつれなどあり、及縁こまかに鈍へて匂ひはさのみ深からず、中には備前物に似たるもあり、地がね弱く白けウツリ棒ウツリなどあり。

○新 刀

新刀は大分入込んでゐるが手柄山の一派が名高く其他宗榮の一派、越前或は大坂より移住せる鍛冶多くあり。

美 作 國

備前實經の子が一番古き様なり、大體備前に似る新刀は關係の兼景其他あり、新々刀には細川正義門多田正利など上手がある。

備 前 國

備前は吾が邦五畿七道六十餘州の内が一番に刀鍛冶の多い國で古刀のみの數が約一千五百餘人もあり、山城、大和、美濃、相州などより數倍も多く又時代も遙に古い所から名匠が澤山にある、後鳥羽院の御番鍛冶が其九分通を占めてゐる、曰く則宗、延房、宗吉、助宗、助成、行國、助延、包道、師實、近房、長助、包近、則次、眞房、吉房、朝助、章實、實經、包助、包末、是助、信正、助則など皆備前である。ケ様なわけで此國は名人を多く世に出してゐる、この國の作にて元暦以前のものを古備前と唱へてゐる、永延の實成、友成、高包、介成、義憲、吉包、信房、高平、包平、助平、正恒、恒次等を古備前と云ふ又此外にもある、此國にもいろいろの派はあるが掟として左の如く傳

へてゐる。

備前物之掟

- 一、反りあるものは腰元にて反る事、これを本反りとも備前反りとも云ふ。
- 二、切先つまり心を用ひある事。
- 三、脇差の姿は先にて指うつむく心に見える事、但し相州傳は別なるもの。
- 四、棟は大畧庵むねなる事、稀に眞の棟もあり。
- 五、及は本より焼出すにより取分横手の内はよく亂及は頭がよく揃へ、大きく亂るゝ所は大きく揃へ小さく揃ふ所は小さく揃ふ事。
- 六、亂及は大亂れ盛んなるものあれども鎬を越すことなき物なり。
- 七、棟の焼けたるものなき事、末備前には見る事あり。
- 八、鍛へ柾目を用ゆる事、備前物柾目と言へど板目多く末作は柾目肌なるが多し。

九、彫物あれば口廣く底へ淺く、樋、梵字劍、龍など大きくアツサリと如何にも幼稚なる如く見へる事、

十、中心の事、姿は少し細目にして四方肉ありて棟丸く先切り、羽方より多く取り棟方よりすくなく取りて兩方の角に少し立て、栗尻なり、古きは雉子股もあり、末作は太く短かく本先なき心なり、棟は大畧角にする、銘の文字以て一門を糺するに大畧左の如くなり。

- 一文字類は銘に助の字を用ゆる事。
- 同一文字類に吉の字を用ゆ。
- 畠田一類には守の字を用ゆ。
- 長船一類には光の字を用ゆ(長光、康光の如し)
- 直宗一類には國の字を用ゆ
- 大宮一類には盛の字を用ゆ。

○鶴飼一類には雲の字を用ゆ。

○吉井一類には則の字を用ゆ。(吉則、清則の如し)

○各流の大畧

○古備前物、太刀多くして小脇差短刀を見ず、鎬造多く、ふんばり強く木反りにして姿上品なり、棟は庵低く小切先、刃紋小丁子烈、小亂れ多く足入り小鈍つき匂ひ深く刃中働き申分なし。

○一文字派、元祖則宗は氣品高く古備前に似て刃紋小模様の丁子亂れ多くあり、二代助宗は大模様なる丁子亂れあり、此一流には名人多く姿もよく刃紋は大丁子、重花丁子亂れなどあり或は逆丁子などありて刃の働き申分なし、地がね柰目榎心交り至極こまかく麗ひあるものなり。

○畠田一派、この派には守近、守家の名匠あり、守近の作は多く見ざるも守家は折々見る刃紋一文字に似て丁子亂れ多く花やかにして潮氣あり、丁子には大中あるが此作の亂には蛙子の丁子とて蝌蚪の形に似た刃あるものあり。

○長船一派、この派にて古きは光忠なり、それから長光、景光などであるが、光忠は刃紋の名人にて美事なる丁子刃を焼く、織田信長は光忠を特に好み數刀集めて所持せりと傳へらる、子の長光も父に次ぐ上手にて名品世に多し、景光、眞長其他此一門に名人多く地刃ともに美事なるもの多く特にこの時代の作には美事なる地ウツリあり。

○相傳備前、相州正宗の門人たる兼光、長義及この一派の出來は長船中にも造込稍替り、反りも淺き心になり身巾もあり重ねも薄き心になるものなり、之又名人多くあり。

○應永備前、應永前後の作になると前者よりは作柄劣り、地がねの味合なども悪くなるものなり然れども師光、康光、盛光等は上手にて一般に應永頃の作は數寄者の賞翫多きものなり。

○末備前物、戰國時代に至ると武用一點張りの刀多く切味は勝れし物多きも姿恰好は自然と悪くなり、長船には與三左衛門尉祐定の如き上手ありその他にも上手は少なからざれ共、刀劍の需要多き時代なれば數打物が澤山に出來た關係上、應永以前の作に比ぶると作柄も劣るもの多し、應

永後の中心は一般に太く短かき物多し。

○新 刀

この國の新刀は長船祐定の一門が繁昌したる外、取立て、記す程の名匠少なし。

備 中 國

この國はお隣の備前につぐ名匠の住んだ地で青江一派、片山一文字などである、青江には古青江末の青江と分けてあるが、古青江中には後鳥羽院の御番鍛冶貞次、恒次、次家、則實などがある。

備 中 物 の 掟

- 一、反りあるものは備前に似て腰元にて反る事。
- 二、古青江には太刀多くして小脇差短刀なし。
- 三、總別切先詰る心を用ひてあること代下に作るは切先伸るもの多くあり。
- 四、身巾せまく平に肉つき鎧高く鎧巾普通なり。

五、棟は庵高く、眞の棟丸棟もあり。

六、又は直刃に鼠足多く入り又は直刃に小亂逆心あり、丁子交りの亂刃などあるが、足入りて匂ひ締るものなり、末の青江は匂ひ締りて足入るもの多くあり、片山一文字は備前一文字同様に逆丁子亂れ匂ひ深く刃の働き特に盛んなり、末の物は匂ひ締心なるものあり、大體刃は大模様なるものなり。

七、帽子大丸小丸等見事なるもの多くあり。

八、彫物は少なく素劍、梵字位あり、樋あるものは樋の中せまく二筋樋などあり。

九、地がね小柰目肌こまかく無地がねの如く、中に澄たる肌あり、これを青江の「スミ」といふ。

十、中心の事、比較的ながく先少しほそ目にして肉あり、先栗尻又は切多く、後代は尻張又は栗尻劍形などあり、鑑はせんすき、大筋違、筋違などあり、銘は刀銘に切るもの多し。

十一、代下る作は中脇差、短刀あるが先反り心にて品位劣り、刃中の見所も少なきものなり。

十二、片山物は短刀少なく太刀及刀多し、中には大切先長刀直し等の脇差あり。

○新 刀

新刀は水田國重の一族ありて非常に繁昌せり、この一派は大阪及び江戸其他各地に分れて造れり、中にも著名なるは大興五國重なり。

備 後 國

備後は三原一派が繁昌してゐるが大體備前物に似て反り淺く、鎬高く重ねの薄いものである、稀に反りの深いものもある、及は中直及、ほそ直及、五の目亂などあるが及の働き少なきもの多し、稀に見事なるもあり。三原物には備前、備中程の名人はなく其作柄も大略同様なり。

○三原一派の掟

- 一、太刀、刀、小脇差短刀あり、鎬造りは鎬高く反り本反り心になる、萬蒲造、鶉首造などあり。
- 二、棟は庵高く眞の棟もあり、切先詰る方なり。

三、及紋、中直及、ほそ直及、五の目亂などあり匂ひ淺く及中の見所少なし。

四、帽子、小さく丸く返り深し。

五、地がね小柰目に衤心あり、古きはこまかき肌なるも末作は肌立つ心にて白氣ウツリあり。

六、中心の事、たなこ形にして太く先ほそく、棟肉先栗尻、劍尻又は及上りなど多し、やすり横又は筋違多し。

安 藝 國

當國は諸所より入込んだるもの多くあまり古きはない、建武時代に長州安吉が小春に住し、其他名人はあまりゐないが、筑前同人の入西が此地にて造れりといふ、新刀は埋忠明壽門の輝廣と若狭の冬廣が廣島に住し繁昌をなしてゐる。

周 防 國

この國は二王清綱の一派がありて有名なり、二王の名は古書に杉の森といふ所の堂、兵火のため

焼失せんとする時、清綱の刀を以て鐵の鎖を切り仁王尊を助け奉りしと云ふ、依て二王三郎と稱し一門繁昌すとあり、刀は備前物に似て直刃多く、匂ひ締心になり刃境キツパリとしたるもの多く、帽子は淺くも焼詰りたるもあり、地がねこまかく肌小柰目にして見事なり、末作は無地がねの如くにて働き乏し。

長門國

當國には筑前安吉移住し其一門繁昌せりといふ故に作柄左の一流に似るもの多し、新刀は二王の末移住せしもので作柄は本國古作に似るもの多し。

紀伊國

紀州には入鹿の一派あり、其作柄は大略大和物と同様なり、別して勝れし作は見ざるも面白き物あり太刀少なく刀、脇差、短刀の類多し。

○新刀

新刀は大和手搔の末包國のち重國と改むこれが名人にして以下繁昌をなし、つぎに石堂一派が繁昌をなし大阪及江戸に分れてそれ／＼一派をなしてゐる。重國には直刃亂刃ともにあるが鈍匂ひ深く上手なり、石堂派は刃紋の上手にてよく出来たるは一文字を凌ぐものあり。

阿波國

海部物として一風替つた造込なり、大平造、片切刃などあるが刀身に銘を切りたるもあり、この國には名匠はないが切味よく武用本位のもの多し。新刀は水田の一派、京の歳長など住して造れり

讃岐國

建保の頃清房の類あるが現在の物極めて少なく正しい在銘物は淺學なる著者は未だ見ず、傳ふ處によれば作柄京物に似て上手ならずとあり。

伊豫國

正應の頃國吉の類があれども之れも世に傳ふる作品少なし、新刀は三好長國の一派其他あるが

長國の一家は寶永の頃松山より會津へ移住し同地にて子孫繁昌せり。

土佐國

當國には土佐吉光とて粟田口物と紛るゝものあり、刀は屯と見ないが短刀を多く見る、中には重ね非常に厚く三角の如きあり、及紋ほそ直刃多し、一見地がねこまかく粟田口風に見ゆるが位たらず新刀は大阪大和守吉道門の吉國系其他あり、新々刀には左の行秀の如き上手あり。

筑前國

當國は備前の系を引いたる良西の一家あり、子の西蓮は名高きものにて、其孫の左文字は相州正宗門にて之又名匠なり。

○左文字、正宗十哲の一人にて勝れた上手なり、太刀及刀多く脇差は折々見る、笠木反りにして反り高く身巾あり、重ね薄き方なり、切先伸び心なるが多い。及紋はいろくあるが此人は正宗門人中刃の働き見事にて小五の目亂れ尖り及交り、足入り玉焼あり、及縁鈍へて砂流交り金筋榴妻

などあり、帽子亂込返り深きが多い、地がね最もこまかく光り強し、一門の出來は大體似て劣るものなり、安吉最も上手にして其他はこれに次ぐ。

○金剛兵衛一派、刀、小脇差短刀あり、刀は笠木反りにして反り中、鎬高く鎬巾せまく重ね厚き心なり、小切先庵むね高し、小脇差は身巾ほそく重ね厚目なるがあり、短刀は笏反りの心あり、及紋ほそく直刃多く中直ぐのたれ亂れ、五の目亂もある、鈍少なく匂ひ締りて及中の見所少なし、地がねこまかけれども黒味あり、中心は卒塔婆頭にて太く本先なき様なり。

○新刀

新刀は信國の一派が繁昌し信國誰々と打もの多く、中にも吉包、守次など上手なり。

筑後國

この國は三池の一派あり、古きは位ありて世に聞えし名人なり、棒樋の上手なり、末は品位著しく下るもの多く其作柄も肥後風に似たり、此他左一派の家永あり、大石に住す世に大石左と稱す、

其作柄は末左に似る。

○新 刀

鬼塚吉國其他下坂の一派あり、吉國は上手なり、新々刀は清秀及其一家は刃紋石堂風にて上手なり

豊 前 國

當國は和銅の頃宇佐宮の社僧にして「神息」といふ名高い鍛冶があるが其作品は極めて少ない、それから永延の頃長圓といふ名高いのもあるが、これは大和物と同じ様な作風といふ、次に京信國の類この國に移住してゐる、新刀は高田一派のもの其他あり。

豊 後 國

當國は彦山の學頭僧定秀あり、其子行平は後鳥羽院の御番鍛冶にて之又名高いものである、世に名品多し、京風の姿にて氣品高く地がね頗るこまかく見事なものなり、この作には鑑上に短かき彫物あり、それから京了戒の一派が移住して繁昌してゐるが大體本國作に似る。

高田一派は正和の友光、建武の友行以下數代ありて大繁昌をなしてゐる、其作柄は行平、了戒に比して大分劣るが武用刀として賞美されてゐる、笠木反りにして備前に似た刃紋ありて刃中見所乏しく、短かきものには皆焼などもあり。

新刀は高田一派の末が大繁昌してゐるが之又武用刀として至極よい物が多くある。

肥 前 國

當國は平戸左の一派と大村光世など其他あるが平戸左は末の左と同様な出来多し、大村光世には相州廣次などに似た出来を見ることあり。

○新 刀

新刀は埋忠門人の忠吉以下大繁昌をなしてゐるが其作風は全く一様で、初心者と雖も少し研究をなされば十本が十本當りを得るものである。刃紋は中直刃上品なもの或は五の目亂、丁子亂などあるが匂ひ深く匂ひ口刃の中に入り地の方に出でざる心なり、これ肥前物の特色なり、又地がね小歪

目肌なるが特に肥前がねとも稱し鎌目肌の如き中に、心鉄様の黒き肌あり、肥前物は皮がね薄きため直ぐに心がね出るものと言はれてゐる。

初代二代三代上手なり、以下一門に勝れし作多く數寄者の賞翫も極めて多きものなり。

肥後國

當國は延壽一派が繁昌をしてゐるが、其作柄は京物來に似て直及多くあり、新刀は同田貫の末其他あるが頑丈な造込多く其他京、越前、豊後より移住したるものなるが勝れたる作品はない。

日向國

天文頃に實昌の類がある、一門上手ならず末備前に似た出來にて中直及燒崩れなどあり、新刀には堀川國廣、井上國貞などの名人を出してゐる。

大隅國

當國には粟田口系の久吉、吉久などあり、久國も京より來りて造ると云ふ、之れ等の實物は至つ

て少ない、時代下りて足利時代に至りては隣國の波平一派の鍛冶が移住したるもの多く、其作柄も波平と同様なり、新刀も薩摩鍛冶に師事せしもの多く其作風も薩摩一派と同じ様なり。

薩摩國

當國は永延の正國以來繁昌をしてゐるが、名匠も又多くあり、正國の作はあまり見ないが鎌倉時代の中期頃よりの作はボツ／＼見受ける、其作風は身巾廣目に重ね稍や薄く京物來の如き風情なり及紋ほそ直及、中直及、小亂及などあり、地がね板目肌に綾杉風になるもの又はウヅマキ形をなしたるものありて比較的見易きものなり。

○新刀

關係の氏房の一派と大和傳の波の平の末がありて以下維新頃まで大繁昌をしてゐる、中にも氏房系の伊豆守正房、主水正藤原正清、主馬首一平安代などは聞えたる名人なり、それから奥大和守元平、伯耆守正幸などは幕末の名人であつた。

慶長十年の古刀位列

(慶長十年乙巳卯月竹屋惣右衛門入道宗味奥書本に據る)

- 【上作の部】 ●天國 ●神息 ●天座 ●菊作 ●行重奥州 ●安綱 ●眞守 ●宗近 ●國友 ●久國 ●國吉 ●國綱 ●吉光 ●元眞(三池) ●定秀(豊後) ●行平 ●正宗 ●義弘
- 【中の上の部】 ●國宗 ●貞宗 ●國光(鎌倉) ●行光 ●包平 ●助包 ●友成 ●正恒初代 ●助平 ●國行 ●則國 ●國安 ●國光(粟田口) ●國清 ●有國 ●信房 ●守家 ●諷誦(奥州) ●世安(奥州) ●正恒(豊後) ●安則(大和) ●行國(大和) ●延房
- 【中作の部】 ●則宗 ●宗吉 ●光忠 ●長光 ●高平 ●國俊 ●了戒 ●國光(來) ●國次(鎌倉) ●行信 ●重弘 ●正恒(二代) ●包永 ●興福寺(大和) ●國吉(筑前西蓮) ●左 ●國重(相州) ●國廣(相州) ●廣光 ●秋廣 ●則重 ●國泰(相州)

- 【下の上の部】 ●景光 ●兼光 ●眞長 ●助宗 ●吉平 ●吉房 ●信包 ●眞守(備前) ●光包 ●貞眞(備前) ●吉眞 ●助眞 ●景秀 ●吉包(備前) ●信正(備前) ●近包(備前) ●元重 ●助成 ●實阿(筑前) ●則房 ●高包 ●行國(備中) ●守次(備中) ●恒次 ●貞次 ●次家 ●正恒(備中) ●國村(後肥) ●國吉(肥後) ●國時(肥後) ●有成(河内) ●爲吉(伯耆) ●國光(越中) ●國光(但馬) ●助眞(州相) ●貞國(相州) ●吉則(出雲) ●正家(三原) ●景長(因州) ●則長(大和) ●月山(奥州) ●國安(越前) ●行仁(薩摩) ●友光(大和) ●雲生 ●雲次 ●國重(大和) ●國信(大和) ●定利(京) ●在國(京) ●兼永(京) ●則高(備中) ●安次(備中) ●俊行(大和) ●國吉(平安城) ●國安(京) ●國綱(肥後)

注進物

(足利家東山義政の時諸國にて切味のすぐれたる刀を注進せしめ書留たるものと云ふ)

- 宗近 ●有國 ●國宗(備前) ●吉國(京) ●信房 ●角國(備前) ●了戒 ●千手院行信 ●信正(備

前 ●國永(京) ●光忠 ●助近(備前) ●助包(備前) ●吉包(古備前) ●守家 ●盛助(備前) ●包永
 ●助行 ●定利 ●新御所(京) ●長則(備前) ●宗正(備前) ●助依(備前) ●基近(備前) ●介成(備
 前) ●末光(備前) ●永包(備前) ●貞綱(備前) ●高包(備前) ●高綱(備前) ●眞守(備前) ●政宗
 (備前) ●行仁(薩摩) ●十二神(京) ●正恒(備前) ●助村(備前) ●國重(相州) ●眞光(備前) ●
 義行(三池) ●眞長(備前) ●實成(備前) ●眞高(備前) ●重吉(備前) ●正恒(備前) ●久則(備前)
 ●吉眞(備前) ●友成 ●恒次(備中) ●利延(三池) ●長光(大和) ●時行(播磨) ●長圓(豊後) ●一
 文字助宗 ●菊作 ●是助(古備前) ●清眞(二王)

右注進物は正和二年丑正月十一日の奥書あり

可 然 物

然るべき刀なり大名へ拜領仰付らるべき物と云ふ部なり
 是も東山義政の時宇都宮三河入道の定めし處

●助則(備前)[以下注なきは備前也] ●助包 ●安則 ●則助 ●則常 ●永包 ●宗忠 ●守恒 ●家安
 ●國光 ●介成 ●高包 ●包助 ●有正 ●實忠 ●成宗 ●重家 ●有行 ●延正 ●友安 ●家忠 ●助久
 ●景則 ●康貞 ●重吉 ●眞眞 ●助光 ●守俊 ●景安 ●實守 ●助眞 ●眞守 ●守家 ●弘次(備中)
 ●行次(備中) ●雲次 ●守重 ●光長 ●則房 ●成綱 ●順慶長光 ●光重 ●則光 ●守次 ●吉房 ●
 次植(備中) ●國長(攝州) ●則依 ●助依 ●助次(備中) ●吉次(備中) ●眞次(備中) ●景依 ●雲
 生 ●景秀 ●行眞(備中) ●長則

太刀、刀のみの作者

本阿彌長根の記す處に據る

●三條吉家 ●五條兼永 ●山城國永 ●來國行 ●粟田口國綱 ●國安 ●粟田口光忠 ●國光
 ●和州安則 ●有俊 ●包永 ●包利 ●安綱 ●眞守 ●古備前 ●信房 ●延房 ●一文字類

太刀、刀のみの作者

- 國宗 ● 備前眞守 ● 光忠 ● 助眞 ● 古元重 ● 行秀 ● 爲清 ● 國分寺助國 ● 景秀 ● 景安 ● 眞長 ● 長則 ● 守重 ● 兼長 ● 雲生 ● 古青江 ● 今山 ● 筑紫正恒

小脇差ばかりの作者

本阿彌長根の記す處による

- 來倫國 ● 吉光 ● 有國 ● 則國 ● 和州吉光 ● 山内國綱 ● 新藤吾 ● 秋廣 ● 廣光 ● 播磨行宗 ● 光包 ● 入鹿 ● 土佐吉光 ● 左安吉 ● 延壽行宗 ● 豊後友行 ● 時行

神田白龍子の新刀位列

白龍氏は鑑定の大作家なり切味を主として吟味したる武用的批評なり

● 堀川 國廣

重々の上作切物至て上手、至極の業物

● 肥前國忠吉初代

近世無雙の上作最上の業物

● 長曾根虎徹

新刀第一の上作最上の業物

● 繁 慶 同

● 加州兼若(四郎右衛門)すぐれたる上手至極の業物

● 河内守國助(國輝子)同

● 南紀重國初代

至極の上手最上の業物

● 水田大與吾國重 同

● 武藏大椽忠廣

同

● 仙臺の國包初代 同

● 堀川國安

同

● 和泉守藤原國貞 同

● 近江大椽忠廣

同

● 大和守吉道 同

● 陸奥大椽長道

同

● 陸奥守忠吉(肥前三代)同

● 丹波守吉道

同

● 藝州住輝廣 同

● 左陸奥守包保

同

● 近江守忠綱(一竿子)同

● 尾州二代信高

同

● 山城守行廣(肥前)同

● 加州陀羅尼吉家

同

● 加州陀羅尼勝國 同

神田白龍子の新刀

- 伊豫大椽宗次(肥前) 同
- 津田近江守助直 同
- 佐々木源一峰 同
- 井上眞改 同
- 和泉守兼定(會津) 上手、切れもの
- 主水正正清(薩摩) 同
- 主馬首安代(會津) 同
- 出羽守源助信 同
- 信濃大椽忠國 同
- 加州藤原信忠 同
- 長船七兵衛尉祐定 同
- 土肥眞了 同
- 日置光平 同
- 津田越前守助廣 同
- 東多門兵衛正成 同
- 武藏大椽左近是一 同
- 肥後守國康 同
- 筑後柳川吉國 同
- 土佐將監爲宗 同
- 和泉守千手院盛國 同
- 紀伊國祐國 同
- 播磨住藤原長綱 同

- 越中守藤原則房 同
- 武州下原廣重 同
- 坂東太郎 同
- 武藏太郎安國 同
- 伯耆守汎隆 同
- 長曾根興正 同
- 大村加卜 上手至極の業物
- 大和守安定 同
- 山城守國清 同

鎌田魚妙が選みし上々作

(鎌田は切味より刃紋を主として吟味したる目利者なり)

- 津田助廣
- 井上眞改
- 堀川國廣
- 肥前國忠吉
- 埋忠明壽
- 高木助直
- 一竿子忠綱
- 主水正正清
- 主馬首安代
- 繁 慶
- 虎 徹
- 大與吾國重

鎌田魚妙が選みし上々作

- 埋忠重義
- 大和守吉道大阪
- 左陸奥守包保
- 堀川住國改
- 小林國輝
- 河内守國助二代
- 興正
- 堀川住正弘
- 丹波守吉道初代
- 坂倉照包
- 堀川國安
- 平安城住美平
- 丹波守吉道祖父丹波
- 南紀重國
- 堀川住國傳
- (以上二十七刀)

山田淺右衛門の切味發表

(山田淺右衛門は幕府の時代刀試しの御用つとめし家なり)

●最上大業物

- 備前秀光
- 長曾禰興里入道虎徹
- 多々良長幸
- 陸奥守忠吉(三代)
- 初代助廣大阪
- 仙臺國包(初代)
- 關兼元(孫六初代)
- 肥前忠吉(初代)
- 長曾禰興正
- 會津初代陸奥大椽三善長道
- 三原正家應永
- 和泉守兼定(のさだ)
- 備前元重
- 備前大兼光

●大業物

- 加州兼則
- 堀川國安
- 應永康光(右京亮)
- 和泉守兼定(關)
- 坂倉照包
- 堀川國廣
- 加州勝國(初代)
- 肥後守國康(初代)
- 近江大椽忠廣(二代)
- 永正祐定
- 彦兵衛祐定
- 角津田助廣
- 初代和泉守國貞
- 主水正正清
- 主馬首安代
- 源兵衛祐定(天正)
- 加州兼若(初代)
- 應永盛光
- 高天神兼明
- 應永家光(備前)
- 青江家次
- 青江近依
- 備前親次
- 應永關兼春
- 直江兼友(初代)
- 大志津兼氏
- 關初代兼延
- 永正兼房(三代)
- 二字銘初代兼定
- 備前兼長(長義門)
- 兼貞
- 關兼基
- 二代目兼元初め最上に入れのちこゝに入る
- 正應大和包利
- 初代包永
- 二代包永
- 大和初代包吉
- 文明勝光
- 元德景光
- 元德の景政
- 青江四代吉次
- 備前義景
- 青江忠次
- 青江四代次吉
- 備中左兵衛恒次
- 備前順慶長光
- 左近將監長光
- 青江直次(文保)
- 大和尻掛則長(初代)
- 同二代則長
- 青江二字延次
- 來國俊
- 了戒
- 延壽國時(建治)
- 相州來國次
- 備前三郎國宗
- 法城寺國光(但馬)
- 三原正家
- 中堂來光包
- 應安青江盛次
- 備前長義

折紙審査の参考

本阿彌より折紙を出したるは慶長の末本阿彌光徳の時より始る此以前には折紙なし

●光徳、この人天正慶長より目利を以て太閤の御用を勤め慶長九年に隠居して元和五年に没す、其弟に光味と云ふありこの人元和元年に没す

●光室、慶長九年家をつぎ寛永二年に没す、弟光益は寛文五年に没す

●光温 寛永三年家をつぐ寛文七年十二月没す寛永、正保、慶安、承應、明歴、萬治、寛文は光温の折紙なり、弟光的是別家して貞享四年に没す、光山は光温の弟元禄二年に没す、光龍も同く弟なり寛文十年に没す、光山も同く弟にて有名な人なり正徳四年没す

●光達は寛文、延寶、天和、貞享を経て同四年に没す、其子光常は寛文七年より貞享三年までなり、光温の三男光眠は延寶六年に没す

●光忠 この人中興の鑑識者なり元禄九年十二月より享保十年まで折紙あり此以後光忠ほどの者出ず

●光勇は享保十年より元文、寛保、延享、寶歴十年までの折紙あり

●光純は寶暦より明和八年までの折紙あり

●光久は明和八年十二月より安永、天明、寛政元年までの折紙あり

●光一は寛政元年より文政八年までの折紙あり

●光鑑は忠鑑と云ひ文政八年より嘉永七年までの折紙あり

●忠明この人の代に至り御維新となり數代連綿とした本家筋が廢れてしまつた、二百年來本阿彌姓を名乗りし者も十五六家ありしが、何れも目利及研職をなしてゐたるが中には甚しい不品行者もあつて、中には家名を穢すやうなものもあつた、故に十二家を選び余は本阿彌を名乗る事を禁じた、其十二家も維新と共に没落したのである。

いまの本阿彌にて鑑定を専門とするもの彌三郎(天籟)日州(猛夫)光遜、光美、光暎などである。
【貫數枚數の事】

札と云ふは金一枚より三枚五兩までの極めあるを札と云ふ(いま下げ札と云)四枚以上、五枚十枚より千枚に及ぶまでを折紙と云ふ

百貫と云ふは代金五枚に當る也、故に三百貫とあるは十五枚なり千貫は五十枚と知るべし、幕府時代(慶安以下)には四枚、六枚、十三枚、十七枚、四十枚、四十五枚、六十枚、百三十枚と云ふ折紙は書かず祝儀其他に忌みたる故なり

足利時代には備前物の枚數多く相州物は至つて安し、徳川時代に相州物俄に枚數多くなれり此事は「刀劍と歴史」等十七號正宗論の部に評論せり就て見るべし

刀の研並保存方の注意

【研方注意】 刀錆たるは心地わるき物なる故愛刀家は必ず研直しをさせんと思ふは尤もなる事なり又錆身など求むれば直ちに研いで見たく思ふは誰しも同じ事なり、上作の刀にて研の古きものは鐵色何となく「どんより」として鮮明ならず錆はなくも之を研ぎなば必ず名刀となるべしと思ひて下手な研屋などに研せる事あらば其刀の古色失て品位を消し後悔する事あり、古刀を下手なる研屋の手に掛るは以ての外にわろし、刀には「おちつき」と云ふものあり研立の時には「キラメキ」て落つかず良き刀もあしく見ゆるものなり澤山の錆あらば格別左もなくば成るべく研ざるをよしとする事なり。

俗に寒研と稱し寒中研せるをよき事と心得るは大きな間違ひなり、寒氣強き時分は鐵堅く石もまた堅ければ研屋も一層骨の折れる事なり此に於て刀を薬灰に投じて刃をなまして研ぐ事あり、一

たび藁灰に投ずれば地刃の境「ぼんやり」として切味に大いなる害あり、藁灰に投ぜざる迄も寒研は必ず熱き湯にて研ぐなりこれも害ありて利なし故に刀を研がするは春秋の二期をよしとするなり

【研料の事】 人々研料の安きを欲するは自分より吾刀を損ずると云ものなり、腕の利きたる研工は自ら工料も高き事故なるべく安き方へ頼む事なれど庸工は鎬を曲げ横手をくるはせ鈍子の肉を落し拭の入かた拙く折角の名刀も散々あしき物となす事其例甚だ多し、研と云ものは第一に砥石の良きものを要す庸工は高價の砥石を求むる事なり難ければ有り觸れたる石にて研ぐべし、砥石の良き物は價極めて高し本阿彌研といふものは及は白砥梨地目と云石にて研ぎ地は内曇と云石にて研ぐ其上を鳴瀧の淺黄と云石にて地刃を合せるなり、斯様に一定の砥石ありて其掟の如くせざれば地刃とも其真相を現はす事難し、故に砥石ばかりは十分に注意し、なるべく上手の手に掛けて研がすべき事なり、下手に任ずるは寧ろ研ざるの優れるに如す

【保存のこと】 刀は濕氣の多き處へ置く可らずなるべく空氣の流通よく日光、風入のよき處へ置くべしまた常々座右に置いて見る刀は格別保存する道具は春秋二回は必ず油をひきて置くべし打粉をかけて拭ふに及ばず油の上に更に油を引て納め置いてよし餘り度々拭ふにも及ばず刀の鞘を純粹の日本紙にて巻きその紙へ澁を引きて置けば錆る事稀なり、鞘を一通り拭き漆にするもよし、一度錆を生じたれば必ず割て「さらふ」べし内部に少しの錆残りてもまた錆を生ずるなり。

新たに研せたる後ち一箇年程は毎月一回位拭ひを入れ油を引くべし落つきもつきてよきのみなり新研は間もなく錆の出易きものなればなり。

多く錆を生ずるは入梅後より夏の末なりこの時に油断す可らず

油は丁子六分と椿油とを合せたるがよし丁子六分、椿四分を合せ寒中木の枝へ掛けて「さらし」たるは最もよし「さらす」こと手數ならば唯だ合せたるにてもよし、拭ひ紙は越前奉書を一夜水につけ（寒水最もよし）陰干にして乾きたるのち、乾きたる手拭にて包み手にて能く揉て紙の筋をぬき柔かにして用ゆべし。

据物切りの諸家

死骸を切て刀を試すことは最も古き時代より行はる、また罪人を切て刀試せし事も源平時代に其事あり、土壇を築いて其上へ死骸を載て切ることは慶長以後より初まる、織田信長の旗下の將に谷大膳と云人田の畔へ死骸をのせて切り試したるが土壇の初めなりと云ふ、其より据物切りと云名は起りしならんと云ふ、刀の忠へ試したる人の名を象眼にて入るゝ事も慶長以後の事なり、試し人の名は中川左平太と云者最も古き様なり、刀の中心に象嵌の入つたもの左の如くあり。

- 一 中川左平太 慶長、元和、寛永 一 富田彌一左衛門尉重綱 延寶より天和
- 一 山野加右衛門尉永久 寛永より寛文 一 根津三郎兵衛尉光政 元祿
- 一 山野勘十郎久英 寛永より寛文 一 松本長太夫雅友 元祿
- 一 山野吉左衛門久豊 貞享より元祿 一 柴崎傳右衛門正次 寛文

- 一 杉崎又左衛門重貞 天和 一 鶴飼十郎右衛門尉義真 貞享
- 一 杉崎新右衛門尉森重 天和 一 鶴飼勘解由長〇(下ノ字切テナシ)元祿前
- 一 服部勘右衛門 元祿 一 伊庭左京 元祿前
- 一 眞島貞右衛門 享保 一 出井仁左衛門 寛永頃
- 一 大沼甚左衛門正重 寛文 一 中四十藏如光 元祿頃
- 一 松波四郎兵衛 延寶 一 比良野貞彦 元祿ヨリ後
- 一 村井藤右衛門 寛文 一 大澤雅助山野弟子 元祿頃
- 一 矢島庄兵衛 寛文 一 桑山丹波守藤原貞政 承應頃
- 一 小川八郎右衛門重治 寛文前 一 宮井六兵衛尉重頼 寛永頃
- 一 梅澤六左衛門勝〇(勝の下不分明)寛文 一 金子助丞 寛永頃
- 一 三村正雄藝州浅野家の土 元祿 一 岡田重長 延寶

- | | | | |
|------------|-----------|------------|------|
| 一 熊田戸兵衛友輔 | 寛文頃 | 一 山田淺右衛門 | 元文 |
| 一 熊田戸平 | (右同人ナルベシ) | 一 山田玄藏 | 元文 |
| 一 井上文七郎勝澄 | 元祿 | 一 山田源五郎 | 天明 |
| 一 大河八右衛門長次 | 寛永 | 一 須藤五太夫 | 天明 |
| 一 松波時右衛門 | 延寶 | 一 山田淺右衛門吉陸 | 寛政前後 |
| 一 前島香右衛門友次 | 寛文 | 一 今井右門信猶 | 寛政 |
| 一 岡本勝右衛門 | 貞享 | 一 小松原甚兵衛良正 | 寛政 |
| 一 倉持竹右衛門 | 享保 | 一 山田權之助吉隆 | 寛政 |
| 一 成田伊右衛門 | 元祿頃 | 一 山田吉豊 | 安政 |
| 一 片田甚太夫 | 享保 | 一 山田朝右衛門吉利 | 嘉永 |
| 一 佐野伴之右衛門 | 享保 | 一 山田五三郎 | 弘化 |

- | | | | |
|--------------------------|-----------|----------|-----|
| 一 伊賀四郎左衛門(尾州犬山藩のち江戸定府天保) | 一 砂川伊兵衛久重 | 延寶 | |
| 一 人見傳兵衛重次 | 寛文 | 一 藤田與右衛門 | 元祿前 |
| 一 寺本丹右衛門 | 寛永 | 一 宇野傳内 | 元祿 |
| 一 小倉權太夫 | 寛永 | 一 寛平之允 | 天保 |
- 右は刀の忠に名を入たる人々なり、此外猶切手は少からずと知るべし

著名なる古刀鍛冶の年代

【山城の部】

- 宗近(永延と云) 同銘伊賀に一人建武頃と云
- 吉家(寛弘) 同銘福岡一文字一人片山一文字一人●賀州一人●新刀に三人
- 國永(文保) 來一派なり同銘備前一人、延壽一人、伊豫一人●新刀大阪一人、江戸一人、奥州南部

著名なる古刀鍛冶の年代

一人

○國友(承元) 同銘九人、大和一人、越中宇津一人、長船一人、備中一人、延壽二人、伊豫一人、

●新刀津輕一人、土佐一人

○久國(承元) 同銘六人、京了戒一派、長船、伯州、日向●新刀土佐等にあり

○有國(寛喜) 同銘六人、京綾小路一人、近江一人、信州一人、伯耆一人、肥前一人、時代不知一人●新刀一人大和太椽

○國吉(弘安粟田口) 同銘三十六人、來一人、大和二人、三河一人、越中一人、越後一人、播磨一人、備前三人、但馬一人、筑前一人、延壽二人、阿波一人、伊豫二人、讃岐一人、日向一人

○國光(粟田口貞永來は建武まで) 同銘二十八人、京三人、大和一人、關一人、三河一人、鎌倉二人、宇多二人、丹波來一人、但馬二人、作州一人、長船二人、三原一人、豊後一人、延

壽一人、伊豫一人●新刀九人

○吉光(弘安頃) 同銘十六人、平安城一人、大和一人、三河一人、備前二人、土佐四人、讃岐一人、筑前一人、波平一人●新刀三人

○國吉(寛喜來) 同銘前粟田口國吉を見るべし

○國行(建長來) 同銘十五人、京二人、大和二人、關二人、越前一人、備前二人、備中一人、延壽一人、豊後一人●新刀日向一人、薩州一人

○國俊(弘長文永) 同銘八人、京三人、丹波一人、豊後一人●新刀二人、延壽外一人時代不明

○國光(寛喜、貞永來) 同銘のこと粟田口國光を見るべし

○國綱(粟田口承元) 同銘鎌倉、大和、三州、遠州、長船、延壽等にあり

○國次(正和頃來) 同銘三十四人、京二人、大和一人、相州一人、關二人、加州一人、宇多一人、青江一人、肥後二人、紀州一人●新刀廿一人

○了戒(來一派初來光重元徳) 同銘なしこの一派に了戒何某と切るもの多し

○信國(初代建武二代貞治) 同銘八人、豊前三人、大和一人、若狹一人、越後一人、長船二人、備中一人●新刀四人

○重光(京達摩初め正宗、文和) 同銘京一人、大和一人、相州一人、雲州一人、長船三人、備後一人、豊後一人●新刀三人

○定利(綾小路弘安徳治) 同銘六人、京一人、大和一人、備前二人、備後一人

○長吉(平安城應永) 同銘京三人、大和一人、關一人、越後二人、長船一人、備後一人●新刀六人

○國重(長谷部正中頃) 同銘五十五人、京二人、相州一人、武州一人、關一人、越前一人、宇多一人、上州一人、長船一人、備中四人、肥後二人●新刀三十八人

○光包(中堂來嘉元建武) 同銘四人、京粟田口二人●新刀一人武州

○吉則(三條派建武) 同銘九人、京五人、三州住一人、備前三人、豊前一人

○明壽(埋忠、重吉慶長、寛永) 同銘古刀に八人●新刀に三人、武州住一人、大隅住一人

○國廣(京堀川住慶長中) 同銘古刀八人、●新刀十人、大阪二人、江戸二人、奥州中村一人、越前一人、豊後一人、肥前一人、豫州一人

○重義(埋忠明壽が子寛永中) 同銘古刀二人●新刀一人

○吉道(京丹波守慶長中) 六代まで京住、七代江戸住、大阪に同銘六人、越前一人、薩摩一人

○久道(京近江守初代寛文) 同銘五人、京三人、駿河一人

○正俊(平安城慶長) 同銘古刀六人●新刀六人、三代まで同銘、平安城一人、武州一人

○金道(京伊賀守慶長寛永) 七代まで同銘、和泉守金道四代まで同銘、外に京一人

【大和の部】

○行信(千手院建久) 同銘五人、越後一人、備中二人、波平一人

○重弘(千手院承元中) 同銘三人、長船二人、千手院重弘のち美濃へ配流されて泉水と云ふ子孫美

濃にあり

- 國行(當摩正應) 同銘のこと山城國行の部を見るべし (友清(元應ころ))
- 友光(當摩應永) 同銘五人、遠州一人、越中一人、長船一人、豊後一人
- 則長(尻懸正應) 同銘八人、京一人、大和三人、加州一人、長船一人●新刀一人
- 貞宗(保昌五郎文永頃) 同銘六人、大和二代一人、相州一人、宇津一人、肥前平戸一人●新刀一人
- 貞吉(保昌一派嘉元頃) 同銘九人、三河一人、備前一人、筑前一人●新刀三人
- 包永(千搔貞應) 五代同銘、京一人、備前一人、土州一人●新刀二人
- 包眞(手搔應永) 同銘大和二人泉州一人
- 包比(元應頃) 大和志津のち關へ移り兼氏と云名人なり
- 包吉(文珠四郎のち關住兼吉)
- 正清(金房文龜) 同銘十五人、泉州二人、相州一人、加州一人、備後三人、防州二人●新刀四人

- 義忠(和州住手搔一派元祿頃) ○國吉(和州郡山住元祿頃)
 - 包清(包永弟子大和一人永正の頃奈良に一人、讃岐に一人)
 - 包國(當摩一人、手搔一人、手搔の包國駿河へ移りのち重國となる(初代南紀なり))
 - 兼光(手搔一派建久頃) ○長光(尻懸一派貞治頃)
 - 信長(二人當摩一派應安及應永) ○行光(應安奈良に住す)
 - 國安(永享頃同銘諸國にあり) ○正清(文龜頃) ○包政(弘治ころ)
 - 國友(薙刀の上手弘治ころ) ○政定(金房一派天文ころ) ○正實(金房一派弘治ころ)
- 【伊勢の部】
- 村正(桑名住初代貞治) 二代應安、三代應永、文龜、天文にもありこの一派に村重、村上、正俊、資正、正重等あり
 - 包永(大和手搔の住當時雲林院に住す) ○包長(文龜ころ包永の弟子)

著名なる古刀鍛冶の年代

○兼定(のさたなり關の人當國山田にて作る) ○兼房(本國關赤坂にて作る) ○末長(三重住)

【尾張の部】

○兼延(志賀住初代建武頃を初代すこの人志津兼氏の弟子なり、二代あり)

○延次(貞治ごろ二代あり) ○久勝(明德ころ)

○兼重(山田住建武頃兼延の子なり) ○梅忠(康正ころ)

【三河の部】

○光宗(正慶ころ中原住) ○國綱(永享) ○吉光(文安ころ) ○吉則(國綱の孫なり)

○政宗(京達摩の正光永徳ころ當國住) ○助次(藥王寺住) ○吉十(藥王寺住)

【遠江の部】

○助眞(建長頃と云出羽にも住す) ○友安(應安) ○元安(應永)

○兼明(應永頃高天神住) ○義綱(天文頃甲斐にも住す)

〔駿河の部〕

○義助(島田住康正頃初代なり天正ごろまでつゞく代々同銘なり)

○助宗(義助の子弘治までに三代あり) ○廣助(弘治) ○國助(天正)

○廣光(時代分らず) ○廣次(同)

〔相摸の部〕

○國綱(京粟田口一人) ○鎌倉山の内藤原國綱一人、外京の部参考すべし山の内は正安徳治ころ)

○國光(京の部に記せり) ●新藤五は鎌倉住長谷部と云ふ永仁正和のころ、京國綱の子なり

○國重(正應ころ國光の子三代あり一説に正宗門と云ふ)

○國宗(備前三郎と云備前より鎌倉へ下る正嘉弘安ころの人なり) 同銘多し來に一人、大和に一人

宇多に三人、三河に一人、長船に二人、青江に一人其外多し

○大進坊(貞永の頃、祐慶法師と云彫物の名人なり)

- 行光(藤三郎と云正慶、元徳ごろ新藤五の門人正宗の父と云)
 ○正宗(岡崎五郎入道新藤五の門人と云建武頃七十歳と云ふなり)
 ○貞宗(正安元年生れ、貞和五に死す五十一歳と云同銘多し)
 ○秋廣(貞宗の門人同銘二人初代は應永に死す) ○廣光(正宗門と云ふ、同銘二代外に一人あり)
 ○廣正(初代廣光門永和三代同銘なり)
 ○正廣(二代廣光門三代同銘あり、初代はのち廣光と云、外當國に同銘一人)
 ○助眞(本國備前、文永の頃鎌倉に下ると云この時六十五歳、この門派多し)
 ○綱廣(享祿のころ綱家の子はちめ助廣と云代々同銘なり) ○廣家(初代綱廣の子)
 ○家廣(天正) ○定廣(永正ころ小田原住) ○貞助(天文頃) ○康春(天文頃) ○康廣(天正ころ)
 ○政俊(二代あり天正) ○俊次(政俊の子) ○次廣(明應) ○正眞(大永) ○正次(大永)
 この外末相州猶多し

〔武藏の部〕

- 爲吉(元弘の頃) ○定家(高麗郡住應永といふ) ○國重(享祿ころ)
 ○正宗(武州恩方村下原大永頃) ○康重(大永ころ二代あり)
 ○照重(天正ころ三代同銘あり) ○國頼(文祿ころ)
 ○助平(文祿ころ) 武州下原の鍛冶なほ多し一々記すに暇あらずいづれも下手なり
 〔近江の部〕

- 貞宗(高木住、鎌倉の貞宗高木にありし時の子と云)
 ○安長(甘露と云貞宗の弟子槍の上手なり貞治ころと云ふ) ○安行(應永ころ)
 ○助長(蒲生住明應頃同銘あり) ○安次(應永) ○自國(弘治ころ)
 〔美濃の部〕

○壽命(本國大和初代は正應ころ建武に一人貞治に一人其以下代々あり新刀にも同銘あり、古きも

の稀なり祝儀物に造りし物も多しといふ)

- 爲繼(越中郷義弘の弟子不破に住すと云應安ごろ)
- 宗吉(壽命宗吉と云初代貞治これも代々同銘あり)
- 金重(正應ごろ越前の僧なりと云元應ごろと云この作稀なり)
- 兼氏(大和の人初め包氏と云多藝郡志津に住す薙刀の名人) ○兼俊(直江志津と云)
- 兼氏(兼俊の子建武) ○兼久(直江志津のち上京) 兼友(直江久六と云兼氏の弟子)
- 兼信(直江志津兼氏門人四代あり) ○兼光(貞治ごろ) ○兼永(應永、二代三代同銘なり)
- 兼吉(康暦ごろ善定と云同銘數代あり) ○兼峯(康正) ○兼房(應永兼宗の子同銘三代あり)
- 氏房(元龜ごろ同銘二代あり) ○兼元(同銘多し初代は正長)
- 兼常(正長頃兼吉の子なり同銘二人) ○兼定(同銘四人)

關鍛冶、赤坂鍛冶、千手院一派等なほ多しこゝには著名の人のみ掲げたり

〔若狭の部〕

- 宗長(應永本國は京なり同銘三代) ○宗次(正長ごろ) ○宗吉(同)
- 冬廣(康正ごろと云相州三代廣光の子應永文明の間代々同銘) ○吉廣(小濱の住永正)
- 次廣(永正) ○信國(京貞光の子と云時代分らず)

〔越中の部〕

- 義弘(松倉郷と云元應ごろ) ○義貞(義弘の養子)
- 則重(元應ごろ初め義弘の弟子のち正宗の門に入るといふ) ○眞景(則重弟子加州住)
- 爲繼(曆應ごろ義弘の子) ○爲次(義弘の弟子觀應ごろ) ○正信(則重の弟子)
- 國光(文保ごろ大和宇多より出づ宇津とも云同銘多し) ○國房(應永)
- 友則(正長) ○國宗(應安代々同銘あり) ○國友(正長) ○國貞(文正)
- 平國(文龜) ○貞國(明應) 宇多一派極て多し以下略之

著名なる古刀鍛冶の年代

〔加州の部〕

- 友重(藤島云來國俊の門代々同銘初代は建武ごろ死すと云二代應安三代は應永)
- 行光(藤島一派貞和ごろ同銘代々あり) ○清光(嘉吉永正ごろ)
- 景光(建武貞景の子三代同銘なり) ○國次(應仁ごろ) ○勝家(永正ごろ)
- 家政(弘治) ○包永(加州住永正) 加州鍛冶なほ多し

〔但馬の部〕

- 國光(建武ごろ相州貞宗の弟子二代は貞治) ○光俊(應永國光の二男) ○貞次(應永)

〔因幡の部〕

- 景長(因幡小鍛冶と云正應より延慶まで同銘三代)
- 兼光(二代景長の弟子のち備前へ移りすむ應安同銘三代あり) ○行景(長祿ごろ)
- 清長(貞治ごろ) ○則清(應安ごろ)

〔伯耆の部〕

- 安綱(三郎太夫と云大同ころと云天平勝寶に生れ弘仁に死す)
- 眞守(延暦に生れ貞觀に死す安綱の子大原住) ○安守(眞守の子正徳ごろ同銘三人)
- 友安(安守の子治安頃) ○爲清(大原新太夫寛仁ごろ)
- 元重(本國備前建武ごろ來り住す同銘三代あり) ○長義(備前長船この國に來り住す)
- 雲上(備前二代目雲上この國に住む貞治ごろ) ○雲生(備前二代目なりこゝに住す)
- 國宗(小鴨住備中より來る) ○正廣(元龜ごろ) ○安廣(天正) ○廣賀(天文より天正)

〔出雲の部〕

- 盛則(應安ごろ本國備前二代雲上の弟子) ○永則(嘉吉ごろ) ○氏重(文安ごろ)
- 冬廣(森山住永祿ごろ) ○忠貞(安部と稱す初代正長頃より代々あり)

〔石見の部〕

○直綱(建武ごろ正宗門人と云五代つづく同銘代々その門人も多し) ○吉末(永正)
○兼長(永正) ○兼貞(大永) ○清繼(天文) ○堪貞(天正長濱住) ○宗吉(天正)

〔備前の部〕

○友成(永延ごろと云同銘二代あり) ○是助(建久頃備前一人福岡一文字なり)
○高包(長慶頃) ○則宗(御番鍛冶剣一文字と云天治に生れ建久八年に死す)
○助宗(大一文字云則宗の子) 同銘島田、備前長船等にあり
○助義(吉岡住貞永頃) 二代同銘外に長船に一人あり
○助吉(建治頃福岡一文字流) 延慶頃吉岡一文字に同銘、一人長船にもあり
○吉宗(承安に生れ元仁に死す宗吉の子) ○是介(承元頃福岡一文字) ○助眞(正元頃鎌倉へ下る)
○光忠(近忠の子建久に生れ文永に死す一説に京都に住すと云粟田口に同銘あり)
○安忠(忠光の弟同時代なり) ○長光(光忠の子、長船に同銘四人あり)

○景光(初代長光の子正應頃) 長船、加州、紀州、因幡等に同銘あり
○近景(長光の弟子貞和に死す) ○眞長(長光弟子、建長に生れ正和に死す)
○俊宗(二代長光の弟子) ○宗光(二代長光の弟子代々同銘あり)
○則光(二代長光の弟子代々同銘あり) ○家助(長光の養子同銘數代あり)
○兼光(正宗門と云建武頃大兼光と云代々同銘つづく)
○倫光(兼光の子といふ文保に生れ康暦に死す) ○師光(文和數代あり)
○盛光(初代は應永同銘文龜まであり) ○義光(景光の子文和に死す)
○長義(正宗門と云正應に生れ應安に死す伯耆、越後等にも住すと云)
○兼長(長義弟子康暦頃と云) ○長吉(貞治) ○重吉(小反り物の祖延慶代々同銘あり)
○康光(應永代々同銘あり) ○勝光(則光の子永正頃代々同銘つづく) ○清光(則光の子三代あり)
○忠光(初代は正長ごろ數代同銘あり) ○賀光(初代明德ごろ代々同銘あり)

- 吉景(應永) ○法光(應永數代あり) ○盛景(應安頃同銘數代) ○家助(盛景弟子同銘あり)
- 則光(應永ごろ同銘數代あり) ○秀光(初代建武同銘あり) ○守光(應仁ごろ同銘あり)
- 祐光(初代嘉吉同銘あり) ○祐定(初代は應永利光の子と云代々同銘多し)
- 守家(畠田一派なり同銘數代初代は實治頃に死すと云)
- 家助(弘長ごろ長船にも同銘あり) ○守行(建武) ○雲上(鶺鴒一派の祖代々同銘弘長ごろ)
- 雲生(守重とも云建武ころ數代あり) ○雲次(初代文保に生ると云二代同銘なり)
- 雲同(延慶と云初代雲生の子) ○景則(吉井の祖正應頃同銘あり) 清則(吉井應永)
- 正則(嘉吉ごろ)

〔備中の部〕

- 貞次(元暦頃御番鍛冶) 同銘大和、但馬、三原、長船等にあり青江にも平貞次と云あり
- 恆次(貞次の弟元暦頃) この恆次數代あり ○次家(貞次の子天暦ごろ)

○爲次(貞次の弟子同銘數人あり) ○次吉(建治)

○吉次(初代建永なり同銘代々あり) ○行眞(建武)

●青江一派猶多し外に月山一派あり

〔備後の部〕

- 正家(正和ごろ古三原と云ふ代々同銘多し) ○正廣(正慶ごろ)
- 政家(正家の子、この同銘も多し) ○正宗(木梨一派なり正家の子)
- 正家(應永この正家有名の切れものなり) ○政宗(康正頃同銘數代)
- 一條(法華と云代々あり尾の道にも住す) ○正清(貝三原と云嘉吉頃同銘あり)

〔安藝の部〕

- 安吉(筑前左の弟子初め安行建武頃のち安藝に住み又長門に住む) ○左(貞和頃小春住)
- 國光(安吉の弟息濱の住美作にも住む建武頃) ○光世(小春住明德頃)

- 光久(應仁頃小春住) ○定行(文保頃左の弟子) ○貞弘(應永頃)
- 宗重(康正頃子孫天正まであり) ○兼守(永享吉木住人) ○眞清(天正頃三人あり)
- この外にも猶ほ多し

〔周防の部〕

- 清繩(清平の孫この人を仁王と云元久頃代々同銘あり) ○清長(文應三代あり)
- 清光(正應) ○清貞(貞治) ○正清(應永) ○清久(文明)
- 膳清(大永) ○元清(文龜) ○元正(天文) ●この外に猶多し

〔長門の部〕

- 安吉(筑前左の子建武ころ長州府中住) ○顯國(貞和頃安吉の弟子二代あり)
 - 顯吉(應安頃のち安國) ○安行(左の弟子安藝にも住すのち安吉と打つ) ○清次(應永頃直及多し)
- 〔筑前の部〕

- 良西(寛喜頃と云) ○西蓮(良西の子文應頃初め國吉と云ふ博多談義所の僧)
- 實阿(正應西蓮の子) ○左(實阿子元應頃正宗門と云隱岐濱の住)
- 入西(良西の子と云永仁頃) ○吉貞(安吉の子貞和) ○吉次(吉貞の子永徳)
- 行弘(左の弟子建武ころ) ○行吉(行弘の弟子) ○宗吉(安吉の弟子)
- 國弘(定行の子左の掣貞和ころ) ○弘安(國弘の子應安ころ) ○安弘(安吉の弟子)
- 安行(安吉の弟子建武三代同銘) ○盛高(金剛兵衛と云良西の掣文應頃同銘代々あり)
- 吉盛(初代盛高の子) ○盛康(曆應初代盛高の孫) ○盛昌(應永) ○盛包(永祿) ○盛宅(天文)
- 長綱(大永) ○家永(大石左一派の祖長祿頃の武士なりと云ふ左の定行の彦に當る)
- 教長(長享頃) ○茂實(文龜) ○朝合(應仁) ○光眞(文龜) ○教光 ○永家(寶徳)
- 著永(明應大石) ○長圓(永延頃大和より來ると云) ○寶壽(正應頃本國奥州) ○貞盛(貞正頃)
- 安盛(應永) ●この外にも猶多し

〔筑後の部〕

○正世(康平頃三池の祖) ○光世(承保頃法名元眞三池の傳太と云) ○利延(光世の子嘉保頃)

○光世(この銘なほ多し時代分らず) ○三池典太、三池典田、三池傳田など切りたる人この子孫にあり

〔豊前の部〕

○定光(應永頃京三代信國の子) ○信國(永享頃豊前宇佐住) ○信國吉助(明應)

○信國能助(永享) ○了戒信行(應永) ○了戒守安(寛正)

〔豊後の部〕

○長圓(永延頃筑前住人) ○行平(永延頃本國大和) ○行重(奥州舞草より來る)

○定秀(僧なり嘉應頃彦山の學頭と云) ○行平(定秀の子紀新太夫と云御番鍛冶なり)

○正恆(行平の孫) ○了戒能定(應安頃京了戒の弟子) この子孫了戒某と云ふもの多し

○友光(正和ころ高田物一派の祖なり) ○友行(建武) ○時行(貞和) ○行守(應永)

○長盛(應永) ○定盛(正長) ○長守(正長) ○盛家(文龜ころ同銘あり)

○鎮永(永正) ○定守(大永) ○盛忠(天文) ●この外にも多くの刀匠あり

〔肥前の部〕

○盛廣(建武ころ平戸住) ○貞秀(應安ころ平戸左と云左の貞吉の弟子) ○治吉(應永頃平戸住)

○重延(濱崎住應仁頃か) ○重則(大永頃) ○貞宗(天文)

〔肥後の部〕

○國村(文應頃本國大和來國行の聲と云) ○國泰(延文) ○國信(弘安同銘數人あり)

○國村(康正の頃) ○國時(文明) ○廣代(應永) ○國賀(建武前) ○末遠(天文) ○國門(天文)

●この外に延壽の鍛冶甚だ多し同田貫もこの子孫なり

〔日向の部〕

○正次(明應文龜) ○通吉(永正頃藥師堂住) ○貞行(永正) ○兼次(大永) ○家隆(天文)

○寛安(永祿) ○國廣(堀川同人) ○實忠(天正)

〔大隅の部〕

○久國(粟田口藤林の子と云) ○久吉(久國の子正治ころ) ○重鑑(天文頃)

○重吉(永祿ころ波平一派と云) ○儀重(天正) ○末次(天正)

〔薩摩の部〕

○正國(永延の頃本國大和) ○行安(正國の子同銘代々あり) ○安行(同く子孫同銘數人あり)

●波平二十餘代づゞき其間門人もまた多し明治に至つて鍛冶の業を廢せしと云ふ

〔紀伊の部〕

○光長(應和ころ奥州舞草の人なり入鹿の祖) ○包貞(文保ころ大和手搔より移る)

○實綱(入鹿住文和) ○實綱(應安) ○景實(應永入鹿住) ○景宗(貞治) ○賀實(永享)

○國次(粉川住應仁三代同銘也) ○吉重(天正頃) ●この外猶多し

〔淡路の部〕

○國長(淡路來と云延文頃この子數代ありと云) ○善國(淡路來應安ころ) ●外に數人あり

〔土佐の部〕

○吉光(曆應頃この子孫代々同銘短刀の作多し) ○近房(弘安) ○宗國(應永)

編者云古今刀匠の數二萬三千餘其外名の傳らざる者幾千人ありしや定かならず、右は世に聞えたる人々のみ其時代を知るの便宜とせしまでなり、詳細の事を知らんとするには銘鑑に就きたもふべし

刀劍試切りと其設備

滿洲事變の勃發以來刀劍の需要が急に多くなりしと同時に切味試しも又盛んになれり、明治の末期に刀劍保存會の職事羽阜先生は左の如きことを言はれ全國を行脚して試切を獎勵されてゐた。

切れざる刀は鐵棒に異ならず、鐵棒の重きは寧ろ櫓の棒が軽くして便なるに如す、櫓の棒便なりとて棒を愛翫するもつまらぬ話なり、されば刀は必ず切れるものならざるべからず、刀は必ず多

少切れざるはなしと雖も、大に切れるものと少なく切れるものとあり、大に切れても切れ味の良からざるものあり、少く切れても切れ味の優秀なるあり、大に切れて切れ味のよき物を大業物と云ふ。さすれば刀を愛する者は先づ此刀切れ味よきや否やを知らざる可からず、焼刃の様子火加減などを審査すれば、其刀の切れる物と切れざる物とは大略判別のつくものなれど、之れを試して見るとさて意外なる結果を見る事なきにあらず、切れさうで切れざるものあり、切れまじと思ふ物却つて切れ味のよきもあり、外觀より見たる目利にては切れ味の事到底分らざるものなり、然らば如何にすべきや、言ふまでもなく刀は試さざる可らず云々。

と盛んに宣傳と奨励をしたものであるが、時未だ熟せざるとも言ふか、某會一部の人々よりは刀は眼で見て業前を知るもので、試しに依つて切れ味を知るは徒らに名器を損ずるのみで、害あつて益なしと反對した輩もありしが、現は共鳴者となり刀は試す方が一番近道ですな……といふ結論に至りし事は地下の羽阜先生もさぞ鼻を高くしてゐらるゝであらう。

さて刀の試し斬りの始めは何つの頃か、それから最も盛なりし時代と沿革の大畧を述べて、其要領と設備などに就て詳述いたさうと思ふ。

刀の刃味を試したることは餘程古い時代より行はれし様である、今村長賀氏の書いたものに依ると多田の満仲時代よりとあつて其後も續いて行はれしといふ、罪人を切つて刀を試したる事は源平時代に其事あり、土壇を築いて其上に死體を載て切つたことは慶長頃より初まりしやうなり、織田信長の旗下の將にて谷大膳と云ふ人、田の畔へ死體をのせて切り試しをなしたるが土壇の初めなりとも云ふ、其より据物切りと云ふ名が起りしとも云ふ、徳川時代に入りては寛文延寶の頃が最も盛んに行はれ、江戸では山野加右衛門尉永久、同勘十郎久英などとの据物切の大家があつた、之等は刀の中心に金象眼にて試銘の入つたものが澤山にあるのを見てもよく分る、此時代には諸藩に試塚ともいふ人があつたやうなり、それから此試し象嵌銘のある刀も元祿迄で其以後は太平の世に慣れ武道も次第に衰へ、それ等につれて刀劍の刃味を試み自らの指料にする様な人々なくなりし爲か、

元祿後には金象嵌の試銘といふ物は頼と見受けない、大抵切付銘である、有名な山田淺右衛門の試した物にも金象嵌はなく切付銘なり、淺右衛門は江戸時代の首切り家で傍ら据物切もよくした、麴町に住し刀味の事に就ては同人の著「古今鍛冶備考」に詳はしくあるが、實際の経験家でもあるが各々刀味を區別して精密なる物を發表してゐる、「懷寶劍尺」といふ小本の中にも淺右衛門の關係した刀味の次第が載せてあるが、第一を最上大業物とし第二を大業物、第三を良業物、第四を業物と四等に區別してある、先づ第一の最上大業物の資格といふのは些の手答もなく十中八九は大切れ物なる事、それに火加減の程よき物なども加へられてゐる、以下順位を定めたものである、これ等は只一二回試したのみでなく數回試みて度々の實驗により切味を分し物の様である。

試切りは要易に出来る

刀の切味を試みることは何人にも要易に出来るものである、然し何の業によらず初めより熟練

せざるものなれば、刀の試しも先づ以て稽古をせねばならない、劍道に功者のものと雖も無雜作に之れを行ふ時は手の裡きまらざれば刀を損することあり、古い話であるが近時一流の劍道の達人(名は特に預る)英國の陸軍士官二名を同道して、試切りをやりたいからトいふて羽澤を訪れた、玄關子早速巻藁を造り、刀は陀羅尼勝國の三本杉大業物を貸與した、其先生は据物切の心得なかりしと見へ、大上段に振上げ紫電一閃切り下ろした處、巻藁は半分位より切れず、それに刀は「くの字」なりに曲げてしまつた事があつた、これも修練のたらざる結果なり、また臺所などにて見る事なるが、女中さん達が太根の汁の實をキザムのを見てゐると、手振あさやかにて何の雜作もあるまじと輪切りにした太根を左手に押へ右手に庖丁を持つて刻んで見ると、手の働き方が甚だしく遲滯し、女房どもがやる如く巧みに調子よくは出来ぬものなり、これも手續にて場數を重ねたる結果なり、これ等は別段に師匠に就て學びたる藝にあらざる事はよく知る通なり、太根を切るにさへ修練を要することなれば、況して刀劍を以て試切をなさんとするには、若干の稽古を要することは勿論なり

稽古をなす方法はいろいろあるべきも、吾人の常にやつてゐる處は、簡単な切臺を造り、卷藁を造つて、廢物同様の刀若しくは錆刀にてもよし、度々やつて見る事である、新進愛刀家の爲に設備の大畧と方法を申べし、参考の一つともならば幸なり。

試し切臺

昔の試し物は人間の胴なれば、土壇といふものを築いたるなり、現は其要なく何れも卷藁にて試す事なれば、土壇の替りに切臺を造るなり、其臺の造り方は一定の場所に据置くものと、何處にても便宜の場所にて切る事の出事るものと二通りある、臺の高さは人々の好みにもよるが、地上一尺七八寸より二尺位迄の高さを多く用ひてゐる、簡単に造る方は圖の如く幹を尺角若しくは其れに準する丸材にてもよし（太



い方が動かんでよし）適度に切り其上に長二尺四五寸の五寸角材をのせて、動かぬ様にカスガイにて止める、また二圖の如く角又は丸材の長いのを地中一尺五寸位も埋め、地上に出たる部の中間に

鐵のボートなり椗の木なりを臺の側面に打通し、左右四寸位も出して、

これへ細引をかけ上の卷藁を堅く結び卷藁の動かぬ様にす、此方は切

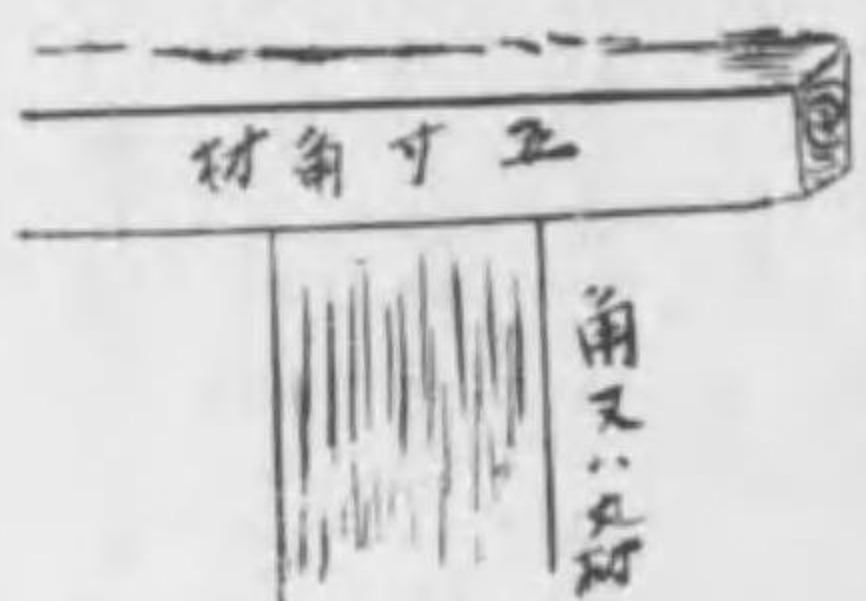
臺が少しも動かんでよし。

堅物を試す時は角材を地中に埋め、臺の前方へ切込を造り、其處へ

鐵板又は銅板を嵌めて切るなり。

卷藁の造り方

俗に羽澤式と言つて居りますが、卷藁の造り方は先づ米俵（皮の方



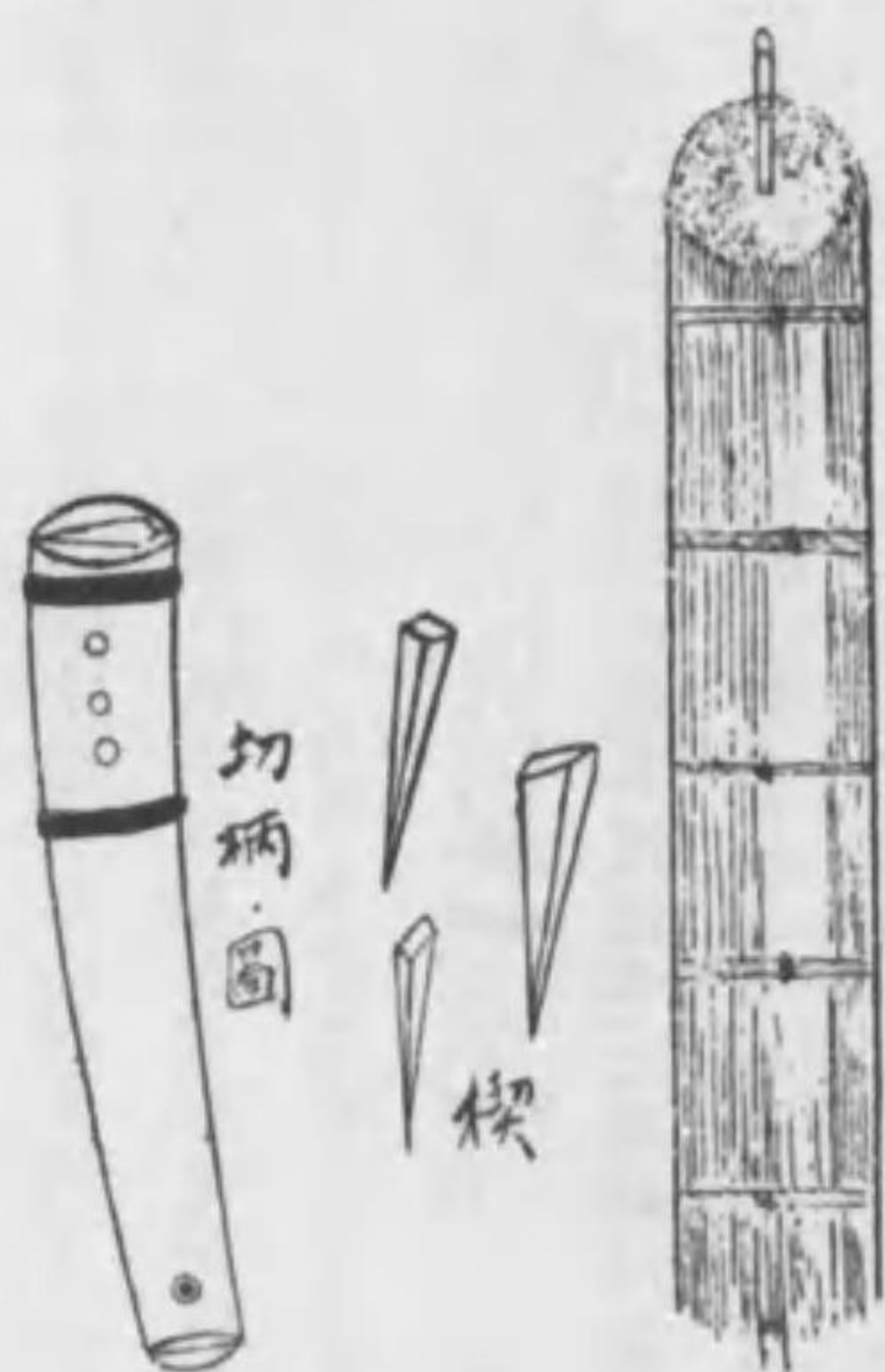
刀劍試切りと其設備

でなく肉のある身の方)一俵の中に拇指大の青竹(直經六七分)を入れてクルクルと巻き重ねて、堅固な繩にて最も堅く結ぶべし、其方法は一人の男が繩の兩端を持ち、足の「かじと」にて俵を踏みつけ、繩を引けるだけ引いて、堅く締つけるなり、卷藁の締加減にて硬くもなりやわらかくもなるが、最も硬きがよい、試切の大家古泉秋水先生などは此卷藁の締方が非常にやかましい、ブク(やわらかいこと)卷藁で切つたのでは眞の切味は試す事が出来ないと言つてゐる、事實そうである、この締方は一俵の卷藁を七ヶ所ほど結ぶがよい、その切方は結目の間を切る、出来上つた卷藁は試切を行ふ一時間若しくは二時間前に水に浸し置べし、あまりながく水に漬けて置事はよくない。

この卷藁が全斷出来れば人間の胴は一つ樂に斬れるといふ事になつてゐるのである、一俵の米俵と雖も多少の大小あるは免れず、直經五寸もあり又六寸位のもあらふ、又竹の太さに於ても大なる相違あるものなれば、大畧前述の寸法に基きて造られたし。

切柄の事

試し切りをなすには別に「被斷柄」を用ゆるなり檜の木にて鐵の輪を嵌めるなり(圖参照)どの



刀にも合ふ如く中心の目釘穴を三四ヶ所あけ、櫃穴は廣く及棟の間は一寸七八分より二寸位、長一尺二寸位より五寸位まで、羽澤式は一尺五寸なり、柄先は其人々の手の裏締りよき程に細むべし。

刀を柄に嵌め動かぬ様に「楔」を打つなり、この楔は檜にても檜にてもよし、大中小多く用意するがよし、刀を柄にはめてガタ／＼働ぬ様十分に締付べし。

目釘は鐵にて造る、但し燒の入つたものは悪し、なまし鐵を用ゆべし、竹にて造るもよし。この切柄を刀に取付る體は即ち圖の如くなるが刀の大小長短により切柄にも自ら大小あり、前述の柄は一尺七八寸より二尺三四寸迄の刀に適す。

薙刀等を試す場合には切柄の中心の入るべき穴を柄先きまで貫きたる物を用ゆ。

切柄、鐵、ニル圖



以上にて現代に於ける切試の道具は出來たるわけなり、以下稽古の方法に就て述ぶる事にす。

試切りの稽古

試し切りの稽古は第一に身構ひなり、弓術に於ける足踏、胴造、弓構等は最も大切なるものであると言はれてゐるが、試し切りも同様で先づ身體のこしらひが大切なり、山田淺右衛門の説明に曰く



處しひ構てつ向に藁卷

截斷柄を付はめ先づ土壇に向ひ、其刀劍の長短に従つて己が體の程間を究め向ふ、足は八文字に肩幅位に足踏開いて截斷物の箇所を見はからい定め、楮柄を握ること左右の偏締りなく太刀を振冠りて體を居り沈み、肩を落し兩脇をむつりと張り、貝殻骨を合せ下腹を張り、腰に力を入れて氣海丹田によく精神を盈しめ、唾を呑み呼吸を定めて口を結び息を詰め、夫れより氣と體と共に、ぢり



刀を振上りしげ圖

と伸び上り、十分満るときは踵まで上る、是れ皮肉の伸びなり此上一と締り上の伸を神心の伸と云ふ又釣合の伸とも云ふなり是れは皮肉の伸十分に満ちて體に伸びる有餘はなけれども、きりきりと締りて一ど位上の神氣の伸る術の至りなり、其調子取はつさず氣よく眞直に打落す、太刀の土壇へ打込み截れ止りても氣體相共に崩れず、息の餘る所第一なり、是れを殘心とも云ふ、或は太刀の落て物に中る時、ぼつと息をつき氣體と共に崩るゝ時は手の内狂ひ良刀も刃を損さしめ、或は通るべき刀もかゝりて截斷鈍きこ

とあり、これ呼吸と氣體の相益さる故と知るべし、或人云へることあり、初め截斷鈍かりし刀を後に刃を付直して、截斷しむる時には能通りて勝れたる業合に成りし物あり、然ればためすと云ふ事は其時宜によれば證となし難しと云々、此等の論居物の道理を辨へざる妄説にして大に初心の疑惑を發す媒なり、勿論鈍刀の良刀に變ずる理なく、唯肉刃の善惡と、切人の氣體の益さるとの譯なり、前に云ふ如く神心の宣なる術にして、其刀劍の力量一樣ならでは截斷ること會てなし、必ず疑惑を生ずべからず大畧以上にて試し切りの要領と精神の一端は知ることが出来ようと思ふが、尙現在吾人のやつてゐる方法に就て補足して置く。

山田淺右衛門は足を踏開く事肩幅位としてあるが、後に六三の曲尺と云ふ事を定め、足の踏み附き方を替へたと「鈴林類纂」といふ書の内にあり、六三の構へとは兩足の開きをいふもので、爪先を六寸踵の間を三寸にしたるなり、この六三の曲尺は腰詰よきなりと言つてゐる、吾が羽澤式も山田流、中川流、山野流等に據つたもので、先づ截斷柄に刀を嵌め巻藁臺に向ひ、見物人あらば一禮

をなし（袖のある衣類ならば褌を掛るがよい）正面に直立し刀の物打が巻藁に當る程の場所に距離を定め、兩足を約半歩踏開き胴體を充分に托し得る様になし「これ弓道に於ける足踏、胴造と同じなり」正面にある巻藁をジツと見詰め、心氣を靜めて柄の先を左手にて握り、右手を軽く上へ添ひる心もちに握り、刀をしづかに巻藁へあて、調子をよく見るなり、これは目的の場所によく當るや否やを見定むるためなり、かくして十分に振冠つて氣合と共に打下すなり、此間の氣合は淺右衛門も言はれてゐるが、全身の力を臍下に集め息をしづめ、心を正しくして妄念を排し、心は何ものも恐るゝ物もなき様に心をゆつとりとし、筋骨ものびやかに、如何にも慮外なる體になし、貴人の馬上にある如く氣高く、悠揚として行ふがよい、兎角業といふものは何事によらず恐るゝと云ふ意あらば、十分に鍛錬したるものと雖も仕損ずる物なり。

かくして數回行ひは太刀筋も定まり、いつ切つても眞直に刀を損することなく切り得る様になること受合なり。

試切は總別手練の關係もあり、場數の掛りたる人ほど分量多く切れる道理なれども、又切手の功者と力の分量によりても、切れると切れざるの別もあり、要するに刀と腕と呼吸の三拍子揃はされば、うまく切れざるものなり。

年數早見出し

(昭和九年まで以下倣之)

大化 五	千二百九十年	文武 四	千二百三十八年
白雉 五	千二百八十四年	大寶 三	千二百三十四年
齋明 七	千二百八十年	天座天國	千二百三十二年
天智 十	千二百七十三年	慶雲 四	千二百二十七年
白鳳 十四	千二百六十六年	和銅 七	千二百二十一年
朱鳥 一	千二百四十八年	靈龜 二	千二百一十年
持統 十	千二百四十九年	養老 七	千二百一十八年
		神龜 五	千二百一十一年

天平二十 三條高祖正家	千二百〇六年	仁壽 三	千〇八十五年
天平勝寶 八	千百八十六年	齊衡 三	千〇八十一年
天平寶字 八	千百七十八年	天安 二	千〇七十八年
天平二 神護三	千百七十年	貞觀十八	千〇七十五年
神護景雲 三	千百六十八年	元慶 八	千〇五十八年
寶龜十一	千百六十五年	仁和 四	千〇五十年
天應 一	千百五十四年	寬平 九	千〇四十六年
延曆廿四	千百五十二年	昌泰 三	千〇三十七年
大同 四 伯耆安綱 字佐神息	千百二十九年	延喜廿二	千〇三十四年
弘仁十四	千百二十九年	延長 八	千〇二十一年
天長 十	千百一十一年	承平 七	千百〇〇四年
承和十四	千百〇一年	天慶 九	九百九十七年
嘉祥 三 大原眞守	千〇八十七年	天曆 備前實成	九百八十八年

年數早見出し

天德	四	伯耆家安	九百七十八年	長德	四	備前正恒	九百四十年
應和	三	陸奥雄安光長	九百七十四年	長保	五		九百三十六年
康保	四		九百七十一年	寬弘	八	備前宗安 友安助平	九百三十一年
安和	二		九百六十七年	長和	五		九百二十三年
天祿	三	陸奥森戸	九百六十五年	寬仁	四	伯耆家時家長	九百十八年
天延	三	伯耆爲清	九百六十二年	治安	三		九百十三年
貞元	二		九百四十九年	萬壽	四		九百十一年
天元	五	備前高平是助	九百五十七年	長元	九	五條兼永	九百〇七年
永觀	二		九百五十二年	長曆	三	備前恒次助秀	八百九十八年
寬和	二		九百五十年	長久	四	三條眞利近村	八百九十五年
永延	二	宗近友成長圓	九百四十八年	寬德	二		八百九十一年
永祚	一	備前包平	九百四十六年	永承	七	五條國永	八百八十九年
正曆	五	大宮定俊	九百四十五年	天喜	五	太泰兼次 兼安	八百八十一年

康平	七	備前介成	八百七十七年	嘉承	二		八百二十九年
治曆	四	備前常保助近	八百七十年	天仁	二	大和高包	八百二十七年
延久	五	三條眞國	八百六十六年	天永	三	大和清利	八百二十五年
承保	三	三池傳太	八百六十一年	永久	五		八百二十二年
承曆	四	備前眞恒	八百五十八年	元永	二		八百十七年
永保	三		八百五十四年	保安	四	青江安次	八百十五年
應德	三	三條宗延	八百五十一年	天治	二		八百十一年
寬治	七		八百四十八年	大治	五	備前眞依	八百〇九年
嘉保	二	備前近恒恒則	八百四十一年	天承	一		八百〇四年
永長	一		八百三十九年	長承	三		八百〇三年
承德	二	備前恒光	八百三十八年	保延	六	二玉清平	八百〇年
康和	五		八百三十六年	永治	一		七百九十四年
長治	二		八百三十一年	康治	二		七百九十三年

年數早見出し

二七三

天養 一	七百九十一年	安元 二	七百六十年
久安 六 備前眞定	七百九十年	治承 四	七百五十八年
仁平 三 青江安次	七百八十四年	養和 一	七百五十四年
久壽 二	七百八十一年	壽永 二 文字則宗	七百五十三年
保元 三	七百七十九年	元曆 一 青江貞次	七百五十一年
平治 一	七百七十六年	文治 五 豐後行平	七百五十年
永曆 一	七百七十五年	建久 九 粟田口久國	七百四十五年
應保 二 出羽行恒	七百七十四年	正治 二 粟田口國友	七百三十六年
長寛 二	七百七十二年	建仁 三 國安・久國	七百三十四年
永萬 一	七百七十一年	元久 二 粟田口國綱	七百三十一年
仁安 三 千手院重弘	七百六十九年	建永 一 畠田守近	七百二十九年
嘉應 二	七百六十六年	承元 四 番鍛治時代	七百二十八年
承安 四 青江則高	七百六十四年	建曆 二 一文字助宗	七百二十四年

建保 六 備前延房	七百二十二年	仁治 三 備前三郎國宗	六百九十五年
承久 三 備前信正	七百十六年	寛元 四	六百九十二年
貞應 二 備前助成	七百十三年	寶治 二	六百八十八年
元仁 一 片山則房	七百十一年	建長 七 備前信包	六百八十六年
嘉祿 二 一文字吉房	七百十年	康元 一 備前景秀	六百七十九年
安貞 二	七百〇八年	正嘉 二 粟田口吉光	六百七十八年
寛喜 三 奥州月山	七百〇六年	正元 一 山内助眞	六百七十六年
貞永 一 畠田守家	七百〇三年	文應 一 備前長光	六百七十五年
天福 一	七百〇二年	弘長 三	六百七十四年
文曆 一 筑前良西	七百〇一年	文永十一 來國行	六百七十一年
嘉禎 三 青江次吉	七百 年	建治 三 新藤五國光	六百六十年
曆仁 一 備前助俊助村	六百九十七年	弘安 十 相州行光備前眞長	六百五十七年
延應 一 備前光忠	六百九十六年	正應 五 來國俊	六百四十七年

年數早見出

永仁 六 大進坊、五郎入道正宗	六百四十二年	元德 二 備前元重	六百〇三年
正安 三 大和包永當麻國行	六百三十六年	元弘 一 延壽國資	六百〇四年
乾元 一 備前景光	六百三十三年	正慶 二 相州貞宗	六百〇三年
嘉元 三 備前兼光	六百三十二年	建武 二 長谷部國重	六百〇一年
德治 二 中原國宗	六百二十九年	延元 四 甘呂俊長	五百九十九年
延慶 三 大和介長	六百二十七年	興國 六 延壽國吉	五百九十五年
應長 一 來國光備前雲生	六百二十四年	正平廿四 相州廣光	五百八十九年
正和 五 延壽國村	六百二十三年	建德 二 延壽國時	五百六十五年
文保 二 波平行安	六百十八年	文中 三	五百六十二年
元應 二 左文字、義弘、則重	六百十六年	天授 六 相州秋廣	五百五十四年
元亨 三 備前長義	六百十四年	弘和 三 加賀眞景	五百五十四年
正中 二 三原正家	六百十一年	元中 九	五百五十四年
嘉曆 三 志津兼氏	六百〇九年	明德 四 山城信國	五百四十五年

應永卅四 備前盛光、康光	五百四十一年	長享 二	四百四十八年
正長 一 藤島友重	五百〇七年	延德 三 備前勝光	四百四十六年
永享 二 備前則光	五百〇六年	明應 九 孫六兼元	四百四十三年
嘉吉 三 備前祐光	四百九十四年	文龜 三 村正	四百三十四年
文安 五 備前宗光	四百九十一年	永正十七 備前祐定	四百三十一年
寶德 三	四百八十六年	大永 七 關兼定	四百十四年
享德 三 大宮盛重	四百八十三年	享祿 四	四百〇七年
康正 二 備後辰房	四百八十年	天文廿三	四百〇三年
長祿 三	四百七十八年	弘治 三 備前春光	三百八十年
寬正 六 三原家次	四百七十五年	永祿十二 備前清光	三百七十七年
文正 一	四百六十九年	元龜 三	三百六十五年
應仁 二	四百六十八年	天正十九	三百六十二年
文明十八 備前忠光	四百六十六年	文祿 四	三百四十三年

元和 九越前康繼	三百二十年	寶永 七	二百三十一年
寬永二五字忠吉南紀重國仙台股包	三百十一年	正德 五	二百二十四年
正保 四	二百九十一年	享保二十一平安代主水正正清	二百十九年
慶安 四	二百八十七年	元文 五	百九十九年
承應 三	二百八十三年	寬保 三	百九十四年
明曆 三	二百八十年	延享 四	百九十一年
萬治 三	二百七十七年	寬延 三	百八十七年
寬文十二長會根虎徹	二百七十四年	寶曆十三	百八十四年
延寶 八津田助廣	二百六十二年	明和 八	百七十四年
天和 三井上眞改	二百五十四年	安永 九	百六十四年
貞享 四津田助直	二百五十一年	天明 八	百五十四年
元祿十六一竿子忠綱	二百四十七年	寬政十二奧元平	百四十六年
		享和 三	百三十四年

〔文化〕十四水心子正秀	百三十一年	文久 三	七十四年
文政十二細川正義	百〇十七年	元治 一栗原信秀	七十一年
天保十四莊司直胤	百〇五年	慶應 三	七十一年
弘化 四	九十一年	明治四十四	六十七年
嘉永 六源清麿	八十七年	大正十四	二十三年
安政 六石堂是一	八十一年	昭和	九年
萬延 一	七十五年		

北 朝 年 號

建武 四相州貞宗	六百〇一年	觀應 二	五百八十五年
曆應 四	五百九十七年	文和 四	五百八十三年
康永 三	五百九十三年	延文 五	五百七十九年
貞和 五	五百九十年	康安 一	五百七十四年

年數早見川し

二七九

鑑刀必携

貞治 六
應安 七
永和 四
康曆 二
永德 三

五百七十三年
五百六十七年
五百六十年
五百五十六年
五百五十四年

至德 三
嘉慶 二
康應 一
明德 四

五百五十一年
五百四十八年
五百四十六年
五百四十五年

二八〇

(本表は各年號の元年迄を計算せるものなり)

昭和九年八月十五日印刷
昭和九年八月二十日發行

不許
複製

編輯者兼
發行者

東京市澁谷區若木町一番地

鶴堂 近藤 周平

印刷所

東京市京橋區木挽町四ノ五

竹井紙店印刷部

印刷人

大澤 松次郎

東京市澁谷區若木町一番地

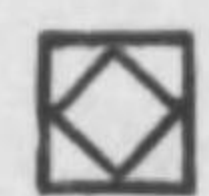
發行所

羽澤文庫

鑑刀必携 奥付

定價 金壹圓六拾錢

近藤鶴堂主幹



月刊 刀劍と歴史

一部金五拾錢
六ヶ月前金參圓

刀劍に關する古今の歴史傳記、論說、考證、刀劍の研究、鑑定の秘訣、質問に對する應答
其他刀劍に關す歴史一切を掲ぐる本邦唯一の雜誌なり。

發行所

東京市澁谷區若木町一番地

羽澤文庫

振替口東京七八一六番

摩利大天 大黑天 辨財天 毘沙門天 大自在天 香寶天 藥師如來 文殊菩薩

孔 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

聖天 帝釋天 多門天 羅刹天 香寶天 辨財天 虛空藏菩薩 地持可

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

蘇摩地藏菩薩 寶深明王 降三世同 十六不動明 淨地羅童子

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

南軍荼利明 大威德明 金剛藥叉司 勢多迦明 聖觀世音 千手明

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

馬頭明 十二面明 揭髻明

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

荒神 俱毘盧神 波夷盧神 宮毘羅菩薩 俱伽羅天將 毘摩羅 武由羅 文由羅

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

終

